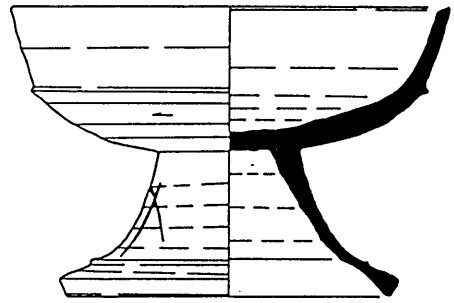
内堀遺跡群Ⅶ

—大室公園整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報—

1995

前橋市教育委員会

内堀遺跡群 Ⅶ



H－6号住居址出土の高杯

前橋市教育委員会

調査区と五料沼

巻頭図版

復原された内堀M－１号墳

序

前橋市は、名峰赤城山の裾野に位置し、水と緑の恩恵を受け、今から23000年前より連綿と歴史を育んできた足跡が市内のあちこちに残る群馬県の県都です。

市では、活力と魅力ある総合機能都市を目指して、憩いの場、スポーツの場、遊びの場、教養の場としての公園づくりを進めてきています。その事業の一環として、市域東部に広がる田園地帯に、広がりのある景観、豊かで多様な自然、貴重な史跡に恵まれた大室公園を造ることになりました。

内堀遺跡群は、大室公園整備により消滅してしまう遺跡を発掘調査した遺跡群です。発掘調査は、昭和62年度の確認調査を経て、昭和63年度から始まり、本年度で第７年次を迎えました。国指定史跡大室３二子古墳（前二子・中二子・後二子古墳）周辺での調査ということで、これまでに地域の歴史を知る大変貴重な資料を得てきております。

本年度は、大室公園内に位置する五料沼北側の切り土部分1200㎡を調査しました。その結果、縄文時代の住居址１軒を初めて検出し、古墳時代の集落として住居址10軒、中世の環濠のものと推定できる溝状遺構１条、ほか溝１条、土坑１基等の遺構、完全な形に復原できそうな土器が50個体以上という多量の遺物の検出等、大室地区の古代の姿をうかがい知ることができ、多大な成果をあげました。

本書は、その調査の概要をまとめたものです。本書が大室地区の歴史を解明する一助となり、大室公園整備、大室３二子古墳整備、資料館建設、古代住居復原等の現在進行している諸事業に少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多大なるご協力をいただきました前橋市公園緑地部を始めとする関係諸機関、ならびに各諸氏に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成７年３月24日

前橋市教育委員会

教育長　岡　本　信　正

例　　言

1　本報告書は、前橋市が整備する大室公園に係る内堀（うちぼり）遺跡群下縄引（しもなわびき）II遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡は群馬県前橋市西大室町（にしおおむろまち）2539番地に所在する。

3　調査は、前橋市教育委員会が実施した。調査担当および調査期間は以下のとおりである。

　調査担当者　前原　豊・戸所慎策（文化財保護課埋蔵文化財係）

　発掘調査期間　平成6年4月25日～平成6年7月29日

　報告書作成期間　平成7年2月20日～平成7年3月24日

4　本書の原稿執筆・編集は前原・戸所が行った。整理作業をはじめ報告書の作成には、伊藤孝子・佐藤佳子・高畑八栄子・竹内るり子・角田正次郎・内藤貴美子・吉田真理子の協力があった。

5　発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫に保管されている。

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に、建設省国土地理院発行の１／20万地形図（長野・宇都宮）と１／５万地形図（前橋）を使用した。

3　本遺跡の略称は６Ｅ11である。

4　各遺構・住居址の施設名の略称は次のとおりである。

Ｊ…縄文時代の住居址、Ｈ…古墳時代の住居址、Ｄ…土坑、Ｗ…溝状遺構、

Ｆ…炉址、Ｐ…柱穴・貯蔵穴

5　遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構　　住居址・土坑・溝…１/60、全体図１/500

遺物　　土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/2

6　スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図　　焼土…淡点、炭化物…粗い斑、粘土…細かい斑

遺構断面図　　火山降下物…濃点、焼土…淡点、粘土…細かい斑、構築面…斜線

遺物実測図　　須恵器断面…黒塗、石器使用痕…網

7　遺物分布図のシンボルの使用は次のとおりである。

●…土器、○…土製品、▲…鉄器、■…石器・石製品

なお接合状態は実線で結んだが、個体別資料数の多いものは結んでいない。

8　火山降下物の略称と年代は次のとおりである。

As-B（Ｂテフラ：供給火山・浅間山、1108年）

Hr-FA（ＦＡテフラ：供給火山・榛名山、６世紀初頭）

As-C（Ｃ軽石：供給火山・浅間山、４世紀中葉）

目　　次

序

I　調査に至る経緯 …… 1

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地…… 1

2　歴史的環境…… 3

III　調 査 の 経 過

1　調 査 方 針…… 6

2　調 査 経 過…… 8

IV　層　　序 …… 8

V　遺 構 と 遺 物

1　住　居　址……10

2　土　　坑……14

3　溝 状 遺 構……14

4　グリッド出土の遺物……14

VI　成果と問題点

1　縄 文 時 代……14

2　古 墳 時 代……16

3　中　　世……17

図　版

口絵　1　調査区と五料沼

ＰＬ．1　平成６年度調査区全景

2　遺跡全景

3　平成６年度調査区と風のわたる丘・復原された内堀Ｍ－１号墳

4　調査区北側、Ｊ－１号住居址

5　Ｊ－１・Ｈ－１号住居址

6　Ｈ－１～５号住居址

7　Ｈ－４・５号住居址

8　Ｈ－６号住居址

9　Ｈ－６・７号住居址

口絵　2　復原された内堀Ｍ－１号墳

ＰＬ．10　Ｈ－７～９号住居址

11　Ｈ－９・10号住居址、Ｗ－１・２号溝、Ｄ－１号土坑

12　縄文土器

13　Ｊ－１・Ｈ－１～３・６～７号住居址出土の土器・石器・石製品・鉄器

14　Ｈ－４～６号住居址出土の土器

15　Ｈ－６～８号住居址出土の土器

16　Ｈ－５・８～10号住居址出土の土器・石製品

挿　図

頁

Fig.　1　内堀遺跡群の位置

2　内堀遺跡群と周辺遺跡……2

3　内堀遺跡群調査全体図……4・5

4　平成６年度調査経過図……6

5　平成６年度内堀遺跡群全体図……7

6　内堀遺跡群標準土層図……9

7　Ｊ－１号住居址……22

8　Ｊ－１号住居址……23

9　Ｈ－１号住居址……24

10　Ｈ－２号住居址……25

11　Ｈ－３・５号住居址……26

12　Ｈ－４号住居址……27

13　Ｈ－６号住居址……28

14　Ｈ－６・７号住居址……29

15　Ｈ－７号住居址……30

16　Ｈ－８・９号住居址……31

頁

Fig.　17　Ｈ－10号住居址、Ｗ－１・２号溝、Ｄ－１号土坑……32

18　Ｊ－１号住居址出土の土器……33

19　Ｊ－１・Ｈ－１～３号住居址出土の土器……34

20　Ｈ－４～６号住居址出土の土器……35

21　Ｈ－６～８号住居址出土の土器……36

22　Ｈ－７～９号住居址出土の土器……37

23　Ｈ－９・10号住居址出土の土器……38

24　Ｊ－１・Ｈ－１・２号住居址出土の石器……39

25　Ｈ－２・４～６号住居址出土の石器……40

26　Ｈ－６・７号住居址出土の石器・石製品……41

表

頁

Tab.　1　調査抄録

頁

Tab.　2　遺物観察表……19～21

発掘調査報告書抄録

ふりがな	うちぼりいせきぐん　なな
書名	内堀遺跡群Ⅶ
副書名	大室公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
巻次	第７巻
シリーズ名	―
シリーズ番号	―
編著者名	群馬県前橋市教育委員会管理部文化財保護課埋蔵文化財係　主任　前原　豊 〃　〃　主任　戸所慎策
編著機関	群馬県前橋市教育委員会管理部文化財保護課
編著機関所在地	〒371　群馬県前橋市上泉町664－４
発行年月日	1995（平成７）年３月31日

ふりがな 所収遺跡群名	ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
内堀遺跡群（うちぼりいせきぐん）	下縄引Ⅱ遺跡（しもなわひき）	前橋市西大室町（まえばししにしおおむろまち）2539番地	10201	6E11	36°23′15″	139°12′00″	19940425～19940729	1200	公園造成

所収遺跡群名 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内堀遺跡群 下縄引Ⅱ遺跡	集落	縄文時代前期	住居址　１軒 土坑　１基	縄文土器（諸磯ａ）・石器	貼り床と床下土坑の検出。
	包含層	縄文時代	包含層		
	集落	古墳時代前期	住居址５軒	土師器（赤井戸式・樽式系を含む）	隣接する周溝墓群と関連を有する集落。
		古墳時代中期	住居址２軒	土師器	
		古墳時代後期	住居址３軒	土師器・須恵器・石器・石製品	
	集落	平安時代～中世	環濠　１条 溝　１条	―	中世の環濠の東端を検出。

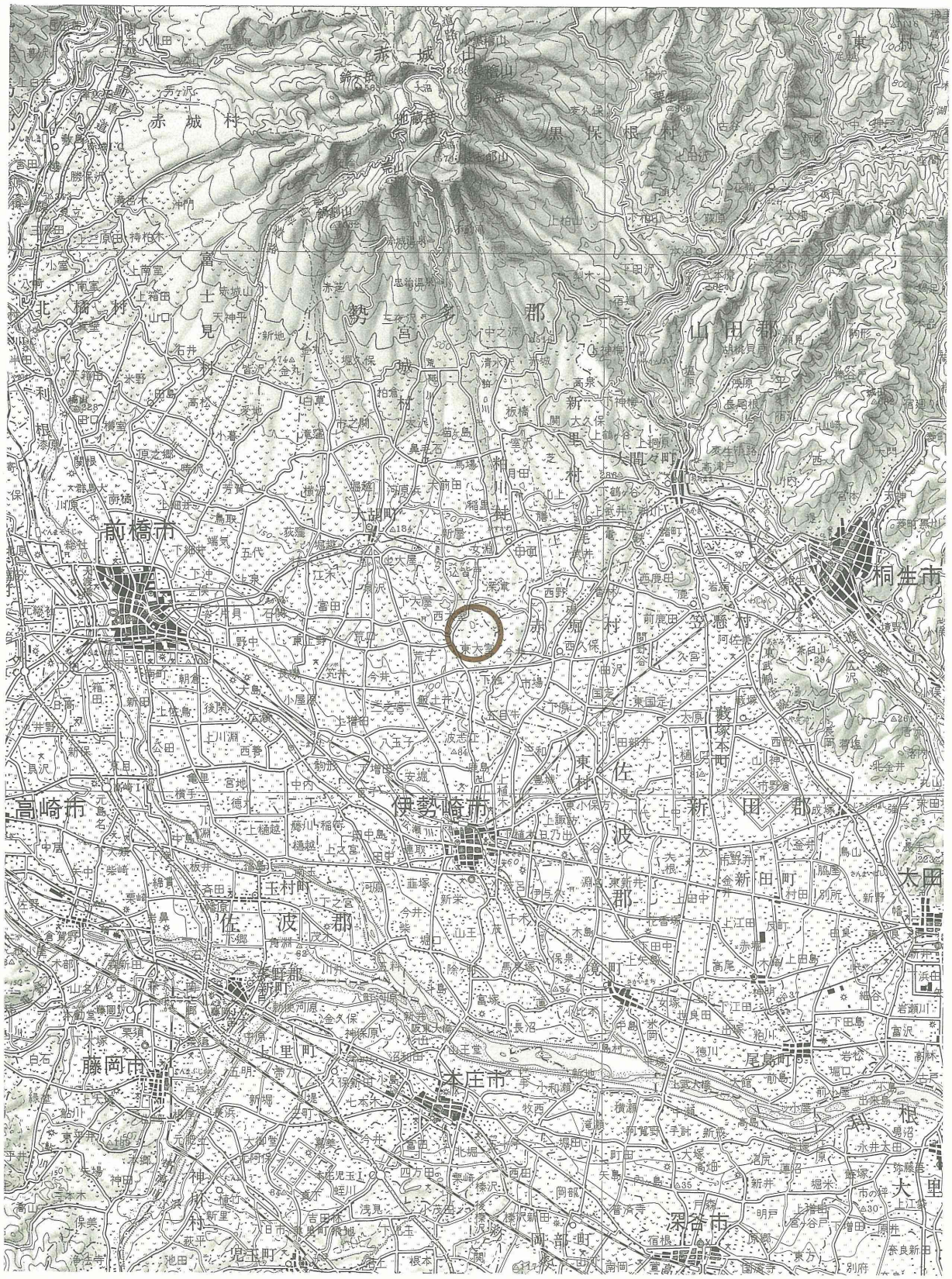


Fig. 1　内堀遺跡群の位置

I　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市の「大室公園整備事業」に先立って行われたものである。この調査は昭和62年度に始まり今年度で８年目になるが、公園建設予定地の埋蔵文化財を調査し公園設計の基礎資料にすることが目的である。

昭和62年度は、公園予定地約369000㎡のうち国指定史跡である前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳・小二子古墳や山林、沼などを除く約200000㎡について東西に10m間隔でトレンチを入れる方法で確認調査を行い、予定地全域についての埋蔵文化財の分布状況を知るとともに、その結果を踏まえ（内堀遺跡群Ｉに収録)、昭和63年度には予定地の北西部約10000㎡についての発掘調査を実施した（内堀遺跡群II)。また、平成元年度は、昭和63年度調査区の西側を中心に約12600㎡について発掘調査を実施した(内堀遺跡群III)。平成２年度は、昭和63年度と平成元年度の調査区を取り囲む範囲の発掘調査と確認調査を実施した。発掘調査の面積は約9000㎡・確認調査の面積は約2500㎡で合計11500㎡である（内堀遺跡群IV)。

平成３年度は、平成元年度第Ｉ調査区の南および西側に隣接したＬ字形の区域約4000㎡について、後二子古墳・小二子古墳範囲確認調査とともに発掘調査を実施した。平成４年度は公園予定地の北西部にある自然丘陵の東側と西側の部分約9400㎡について、前二子古墳の範囲確認調査と並行して発掘調査を実施した。また、Ｍ－６号墳の範囲確認調査や一部試掘調査も行った（内堀遺跡群Ｖ)。

平成５年度は、五料沼の北側の部分3130㎡について、２カ年計画の２年次の中二子古墳範囲確認調査の前に発掘調査を実施した（内堀遺跡群VI)。

今年度の調査は、昨年度の調査区（Ａ区）の水路をはさんだ東側の部分1200㎡について、２カ年計画の２年次の中二子古墳範囲確認調査と一部並行して発掘調査を実施した。調査した部分は公園整備が予定されている地域で、記録保存を目的とした調査である。なお、初年度以前の経緯については『内堀遺跡群Ｉ』に詳しく述べられているので本書では省略する。

II　遺跡の位置と環境

１　遺 跡 の 立 地

内堀遺跡群が所在する前橋市西大室町は、前橋市の中心市街地から東へ約15㎞の所にある。遺跡は国道50号線東大室十字路より北へ２㎞で、県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点から北東１㎞に位置している。またＪＲ両毛線伊勢崎駅から遺跡へは北約７㎞にあり、上毛電鉄

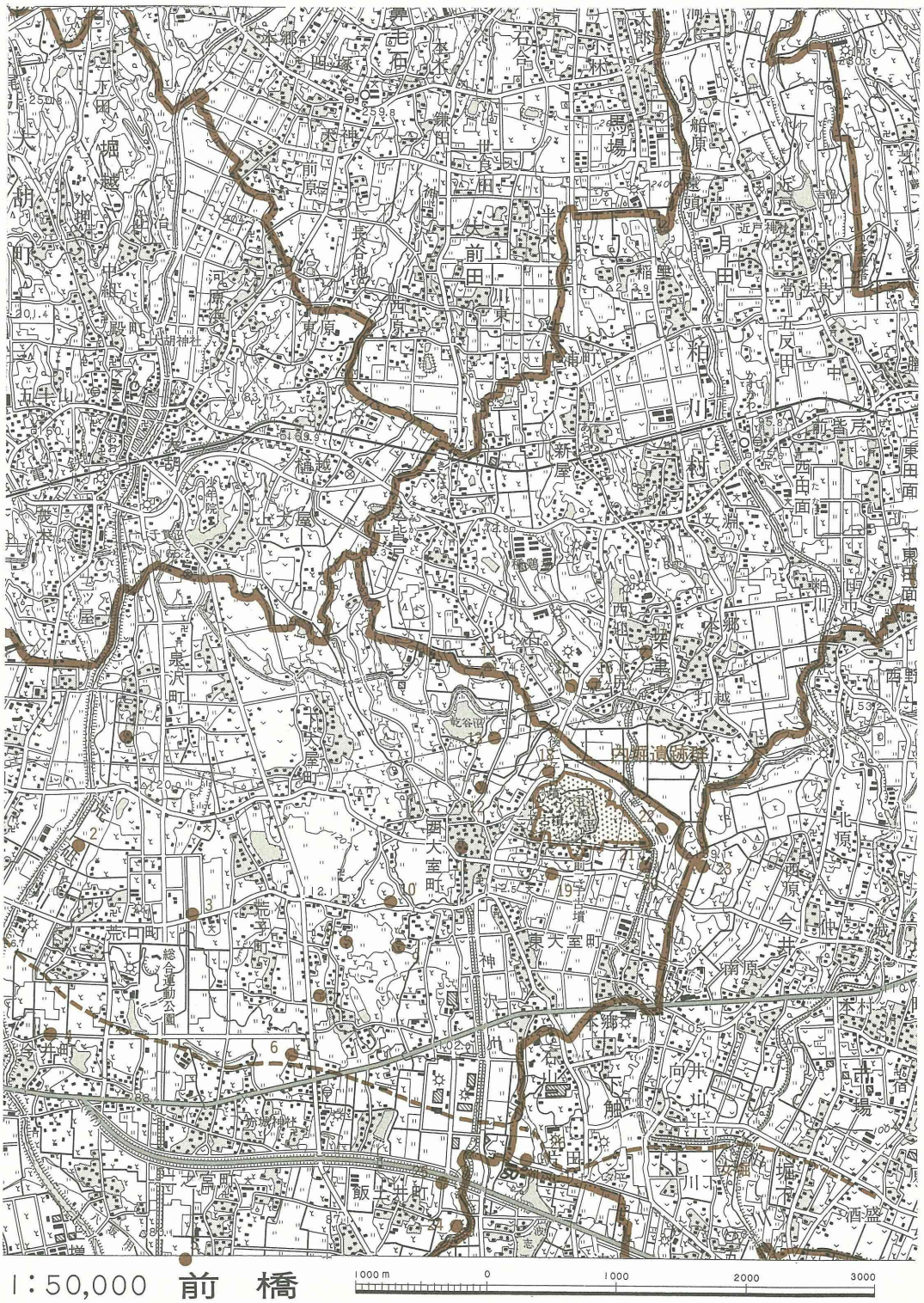


Fig. 2　内堀遺跡群と周辺遺跡

粕川駅からは南南西に約3kmにある。東側は多田山と呼ばれる火山泥流による丘陵地形があり、赤堀町との境となっている。また、北に接する粕川村とは、七ツ石とよばれる信仰の対象となっている巨石のある丘陵とそれに連なる丘陵地形を行政上の境界としている。

平成6年度の調査区は内堀遺跡群（公園予定地）の北に位置し、昨年度の調査区の水路をはさんだ東側になる。

本遺跡群の東端には五料山とよばれる自然丘陵があり、また、後二子古墳の南側、さらには前二子古墳が造られた所も丘陵地形となっている。この地区の丘陵地形の基盤は、すべて粗粒安山岩よりなる火山泥流によって形成されており、それらが露出しているのが、七ツ石や石山観音、産泰神社裏の巨石などである。また、平成3年度調査区内から小さな谷地が入り、かつては湧水による小河川があったものと推定される。現在五料山の西側には小河川が流れているが、近世頃にこの谷地の南側に堤を造り、堰止めてできたものが五料沼である。本遺跡のある丘陵の北側には現在水田地帯が広がっているが、下縄引Ⅰ遺跡や粕川村五反田遺跡の存在からこの地域を当時の生産基盤と考えることが難しいため、上記の谷地を含めた南側に生産基盤を求めたい。本遺跡地の標高は、129m～130mである。

2　歴史的環境

内堀遺跡群のある荒砥地区は自然に恵まれた風光明媚な所であるとともに、大室3二子古墳を始めとした周知の遺跡が存在する考古学上にも重要な地域である。そこで、本遺跡群を理解するために周辺の歴史的環境をみてみたい。

まず、旧石器時代の遺跡として、荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に尖頭器がまとまって出土した荒砥北三木堂遺跡④、ＡＴ下の国内最大の「環状ブロック群」が検出された下触牛伏遺跡㉖、また、宮川の沖積地に臨む柳久保遺跡群③においてナイフ形石器、細石刃等の旧石器文化の遺物が出土している。

続く縄文時代には、草創期の遺跡として爪形文土器が検出された下触牛伏遺跡㉖がある。二本松遺跡㉕や柳久保遺跡群からは、田戸下層期の土器が出土している。前期の遺跡は、荒砥二之堰遺跡㉔、荒砥上ノ坊遺跡⑥、荒砥上諏訪遺跡⑲など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているが、いずれも5～10軒の中・小規模の集落にとどまっており、赤城村三原田遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。

弥生時代の遺跡は水田耕作に適した沖積地を臨む台地や微高地に立地しており、中期後半から後期の小規模集落が荒砥島原遺跡⑤、荒砥上川久保遺跡⑳、西原遺跡⑯、西迎遺跡⑰などで見られる。古墳時代前期の遺跡としては、本遺跡の北西に隣接する上縄引遺跡⑱をはじめ、北山遺跡⑬、七ツ石遺跡⑭、久保皆戸遺跡㉒、梅木遺跡㉑などがある。この時期の遺跡は、住居出土の土器を見る限り複雑な様相を呈しており、弥生時代後期の樽式・赤井戸式土器はこの時期まで残存し、土師器と共伴する。そのうち、浅間Ｃ軽石降下後およびＦＡ降下前の各遺跡の住居は、内堀

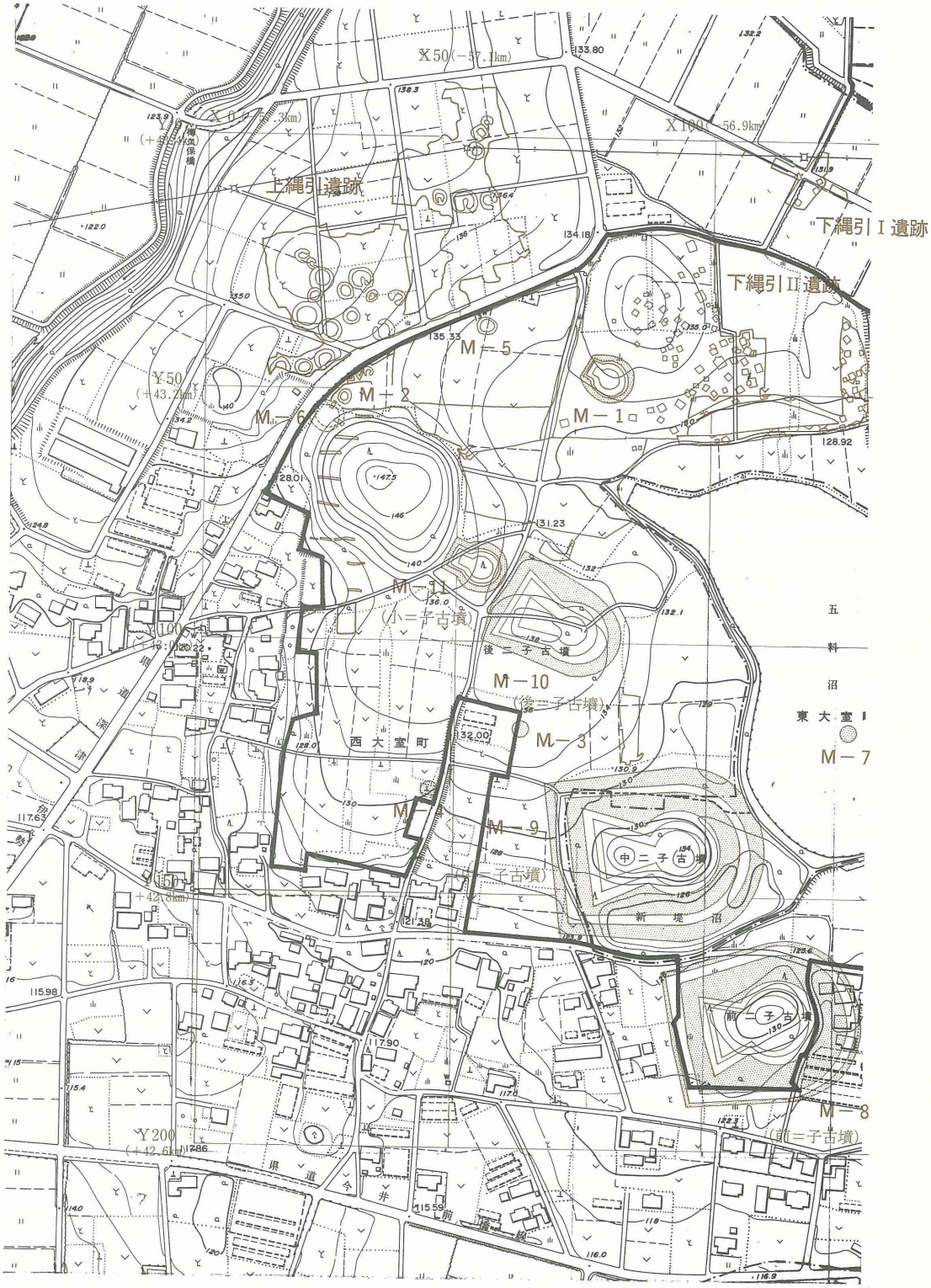
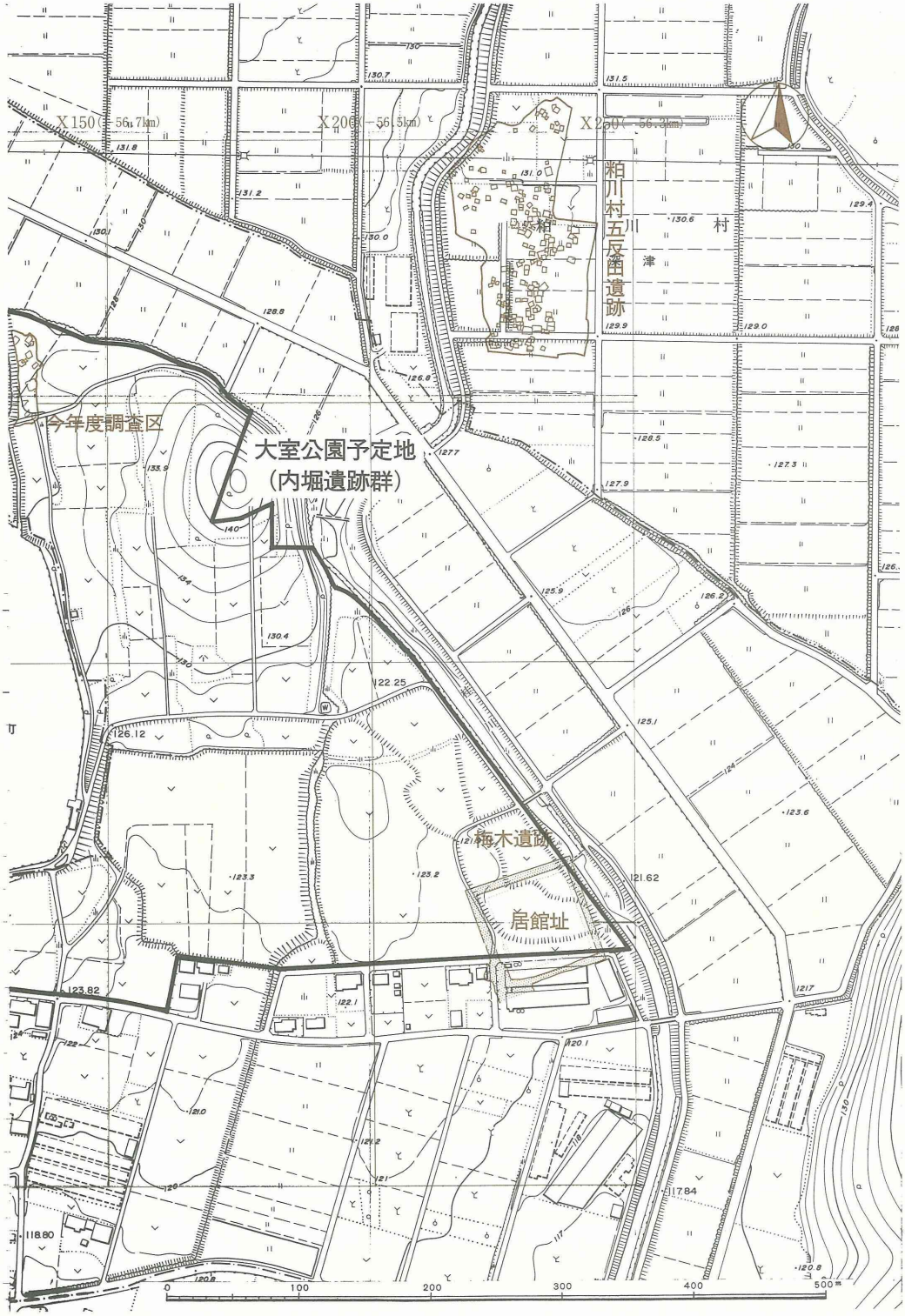


Fig. 3　内堀遺跡群調査全体図


X150(56.7km)
X200(56.5km)
X250(56.3km)
粕川村五反田遺跡
粕川村
今年度調査区
大室公園予定地
(内堀遺跡群)
梅木遺跡
居館址
0
100
200
300
400
500m

遺跡群下縄引II遺跡の集落に対応するものであると考えられる。また、下縄引II遺跡の集落の墓域として上縄引遺跡の周溝墓群を考えている。5世紀後半から6世紀代に入ると、赤堀茶臼山古墳㉓をはじめ強大な支配者の存在を暗示する大室3二子古墳が築造され、この地区が当時の中心的様相を呈するようになる。梅木遺跡で検出された首長層の居宅は大室3二子古墳と何らかの関係があると推定される。このほかに居館址として、荒砥荒子遺跡⑦、丸山遺跡①などがある。また、荒砥荒子遺跡の豪族居宅遺構と関連し、舞台遺跡1号古墳⑧および西大室丸山遺跡⑨があり、豪族の勢力格差により居宅・古墳の規模、祭祀行為に相違があったことが窺える。6世紀後半から7世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、1～3基程度の散在する小円墳も出現するようになり、支配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。粕川村深津の三ケ尻西遺跡⑮では、7世紀後半の製鉄遺構3基と住居跡が確認された。古墳群が密集した地域であることから、有力な豪族が招いた技術者の集落址で製鉄品造りの拠点になっていたと推定される。また、西大室では赤城南麓の古墳時代終末期を代表する截石切組積石室をもつ富士山古墳⑩が築造され、高度な石材加工技術を習得していたことが窺える。

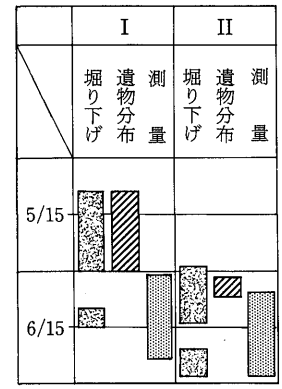
奈良・平安時代には居住域が台地全体に広がり、水田開発が進み、荒砥諏訪西遺跡②では微高地まで水田化している。また、12世紀の中頃、開削されたとされる女堀の遺構も残存している。また、奈良～平安時代の炭窯址が横俵遺跡群や粕川村の西原古墳群、大胡町の上大屋・樋越地区遺跡群等の近隣市町村から検出されており、当時赤城南麓の近隣で盛んに木炭生産が行われていたことが窺える。中世以降の城郭としては、大室城⑪、元大室城⑫、今井城、赤石城などがあり、荒砥北三木堂遺跡などでは多数の墓坑が調査されている。また、井戸や溝など近世の遺構も、多くの遺跡で確認されている。

III 調 査 の 経 過

1 調 査 方 針

調査の実施にあたっては、国家座標に基づいた原点を据えて、内堀遺跡群全体グリッド（4mグリッドを基本とし、西から東へX0～X250・北から南へY0～Y200グリッドの設定枠）を用いた。ちなみにX125－Y50グリッドは第IX系の＋43200.000m・－56800.000mで、北緯36°23′15″.8002・東経139°12′00″.4300に当たる。調査面積は1200m²である。

調査には期間的制約があるため掘削用重機を用いて表土の除去を行い、As-Cが混じる黒色土面もしくは、淡色黒ボク土上面を出した。



Iは古墳時代の面の調査
IIは縄文時代の面の調査

Fig. 4　平成6年度調査経過図

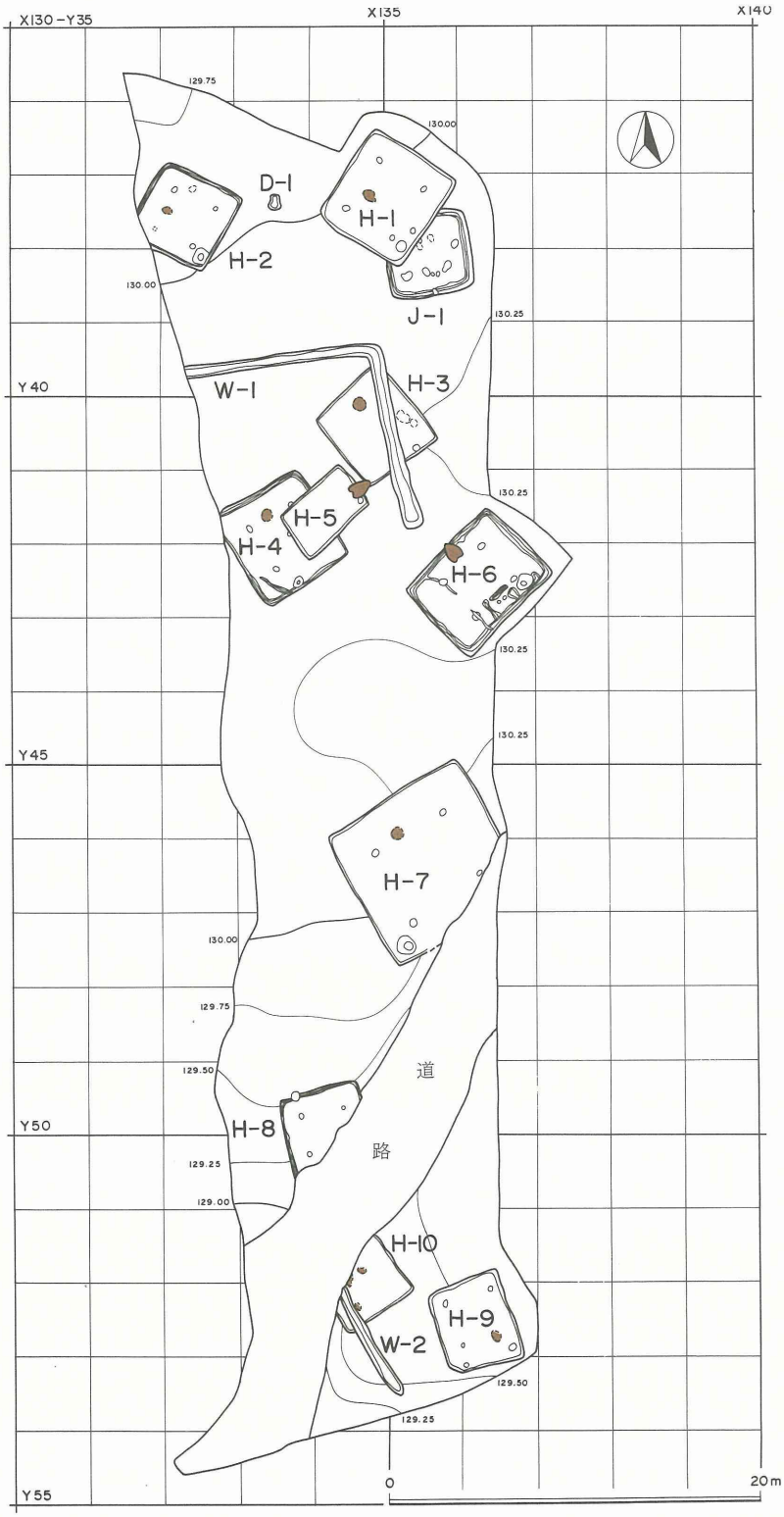


Fig. 5　平成6年度内堀遺跡群全体図

この時点で直ちに古墳時代以降の遺構の確認に入り、並行してグリッド設定、ベンチマーク(水準点）の設置を行った。その後、平板測量で遺構の配置図を作成し、各遺構の調査工程を検討した。具体的には

1　遺構の掘り下げは、セクションベルトを設けて土層観察を行いながら進める。

2　遺物について、10cm四方以上のものは縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。

3　炉と竈の図化については、原則として縮尺1/10にて、遺構平面図については、原則として縮尺1/20にて実施する

以上の方針の下に調査を進めた。

2　調　査　経　過

発掘調査は、平成6年4月より現地調査、発掘事務手続き、公園緑地課との事前協議などを十分行ってから、現場事務所の設置や発掘調査用具の搬入など本格的な準備を行い、4月25日より発掘調査を開始した。バックフォー(0.7m³)と4tダンプトラックとで北側から表土掘削を開始した。表土掘削に追従してプラン確認を行い、4月27日に杭打ちを実施し、4月28日には表土掘削は終了した。5月9日から遺構の掘り下げを進めた。調査の結果、住居址11軒・土坑1基・溝2条が検出された。調査面積は1200m²。その間、6月3日に業者委託によるラジコンヘリコプターの空中写真撮影、6月6日より住居平面図・遺跡全体測量を行った。6月6日からは縄文の住居址の精査を中二子古墳の調査と並行して行った。6月20日には、土器の水洗・注記もすべて完了した。6月30日にはJ－1号住居址の精査と図面の最終確認を行い後は埋め戻しのみとなった。中二子古墳の調査の進捗と合わせて7月22･25日に重機による埋め戻しを実施し、7月29日をもって残務整理を終え、7月一杯で全調査を終了した。

調査区の西側は五料沼に流れ込む水路で、また、南側の一部は公園造成前の道路により遺構が切られていたのは残念であった。

遺物整理作業と報告書作成は中二子古墳の報告書作成作業の終えた2月下旬より3月24日まで行った。また、2月1日と2日には、五料沼北側の公園造成工事による試掘立ち会いを行った。平成5年度調査の溝W－14・16号に続くと思われる溝1条を確認した。

Ⅳ　層　　序

X98－Y23グリッドの土層を基にして本遺跡の標準土層図を作成した。本遺跡は、内堀遺跡群の北東部に存在し、約20～30万年前に赤城山の山体崩壊によって、引き起こされた梨木泥流によって形成された「流れ山」を中心とした標高129～137mの丘陵性台地である。「流れ山」の頂上には

梨木泥流によって運ばれた大形の礫が一部露出し、土層の堆積も薄く、ちなみにⅦ層のＡＴ（姶良丹沢パミス）が表面から50～60cm程度で検出できる。

Ｉａ層　黒褐色粗砂層。耕作土層。As-B（浅間Ｂテフラ：1108年降下）を50％以上含む。粘性なく、締まりあり。

Ｉｂ層　黒褐色土層。As-B、As-C（浅間Ｃ軽石：４世紀中葉降下）、Hr-FP（榛名二ツ岳軽石：６世紀中葉降下）を含む粗砂層。粘性はないが、締まりはある。

IIａ層　As-B純層。天仁元（1108）年に浅間山より降下した軽石層。わずかに間層をはさんで上部にAs-Kk（浅間粕川テフラ）が存在する場合もある。

IIｂ層　黒色細砂層。As-C、Hr-FP（径20mm）を15％含む細砂層。粘性を有し、締まりあり。IIｃ層　暗灰黄色細砂層。粘性は少しあるが、締まりが弱い。

III　層　黄褐色細砂層。淡色黒ボク土。粘性は少しあるが、締まりが弱い。縄文時代遺物包含層。

IVａ層　明黄褐色硬質ローム層。As-YP（浅間黄色軽石：約1.3～1.4万年前）を10％、As-SP（浅間白糸軽石：約1.75万年前）を５％を含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

IVｂ層　明黄褐色土層。ハードローム層。As-YPを５％、As-SPを10％程度含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

Ｖ　層　明黄褐色硬質ローム層。As-BP（浅間褐色軽石：1.8～2.2万年前）をブロックで20～30％程度含む層。粘性があり、硬く締まる。

VI　層　明黄褐色硬質ローム層。As-BPをブロックで15％程度含む層。粘性があり、締まりが弱い。

VII　層　明黄褐色微砂層。風化土壌。粘性を有し締まりは弱い。ＡＴ（姶良丹沢パミス：約2.2～2.5万前）の含有が極大値を示す。

VIII　層　明黄褐色粘土層。暗色帯。粘性が強く、締まりの弱い粘土層。色調でａ・ｂの２亜層に分類できる。

IX　層　明黄褐色粘土層。粘性が強く、締まりのある粘土層。ａ～ｄの４亜層に分類できる。

Ｘ　層　明黄褐色軽石層。Hr-HP（榛名八崎軽石：4.2～4.3万年前）。３亜層に分類でき、Ｘa層は比較的大粒な軽石層、Ｘb層は火山灰層、Ｘc

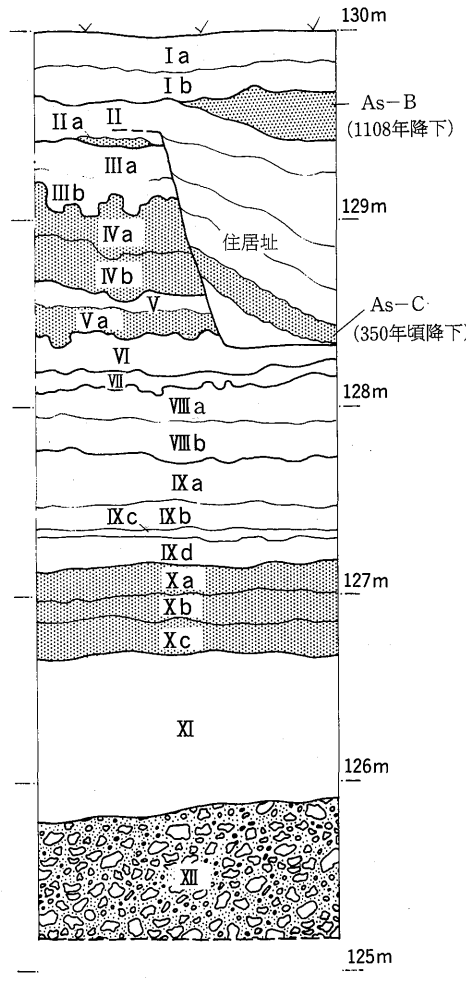


Fig. 6　内堀遺跡群標準土層図

層は軽石層である。

XI　層　褐色粘土層。水性堆積で非常に粘性が強い。

XII　層　青灰色砂礫層。巨礫によって構成される。梨木泥流（約20～30万年前）によって形成されたと考えられる「流れ山」。

V　遺構と遺物

本年度の発掘調査では、住居址11軒（１軒は縄文時代）・土坑１基・溝２条が検出された。残念なことに、調査区の西側は五料沼に流れ込む水路で切られており、また、調査区の南側一部は公園造成前の道路により切られていた。昨年度の調査区（Ａ区）の水路の反対側になる。

調査の主体となった古墳時代の住居址は前期が５軒、中期が２軒、後期が３軒である。このうち前期の住居址は、すでに報告されている住居址と合わせると総数104軒になる。このほかに、縄文時代の住居址は内堀遺跡群の調査で初めて検出された。また、土坑は縄文時代の住居址のすぐ西側にあり、住居址との有機的な関係が考えられる。Ｗ－１号溝は、昨年度のＷ－２号溝と接続するものであり、中世の館跡を囲む溝の東側の範囲を決める重要な遺構となった。

１　住　居　址

Ｊ－１号住居址（Fig. ７・８・18・19・24、PL. ４・５・12・13）

（位置）Ｘ135・136－Ｙ37・38Ｇ（重複）Ｈ－１に切られる。（形状）隅丸正方形　（規模）長軸4.72×短軸4.66m。確認面からの壁高55cm。（面積）現存16.01m²（方位）Ｎ－８°－Ｗ（覆土）３層に大別できる。As-YPを20％含む。（床面）中央部分に黒色土ブロックによる貼り床。深鉢を用いた埋設土器が１基検出される。（炉址）中央部やや北よりに焼土や炭化物を検出し、精査の結果、炉址を２基検出した。F_1はやや北側の中央の西側に位置する。長径56×短径38cmである。F_2はF_1の東側にあり長径49×短径35cmである。（柱穴）総数16個の柱穴を検出した。主柱穴については規則性がなく判然としなかった。また、南西部の周溝内に壁柱穴が部分的に認められた。（床下土坑）貼り床の下から３基連結した床下土坑を検出した。（周溝）調査した範囲では全周する。（遺物）出土遺物は総数434点である。土器が403点、石器が31点である。土器のうち縄文土器は半截竹管文を主体に390点である。半截竹管文の内訳は、幅が広い連続爪形文27点、幅が狭い連続爪形文５点、連続爪形文67点、平行沈線45点、集合沈線47点である。このほかに縄文【Ｌ】10点、縄文【ＬＲ】26点、縄文【Ｒ】５点、縄文【ＲＬ】98点、隆帯17点、文様不明38点、無文５点で構成される。混入の土師器13点も存在する。石器の内訳は、石匙１点、削器２点、磨石１点、凹石２点、蜂巣石１点、剝片23点、結晶片岩自然礫１点である。石材の内訳は、チャート10点、頁岩８点、黒色頁岩５点、黒色安山岩３点、粗粒輝石安山岩４点、結晶片岩１点である。このうち、土器に

ついては１～21を図示し、石器は22の石匙、93～96の磨石・凹石を図示した。（備考）縄文時代前期諸磯ａ式期。

Ｈ－１号住居址（Fig. 9・19・24、PL. 5・6・13）

（位置）Ｘ134・135－Ｙ36～38Ｇ（重複）Ｊ－１を切る。（形状）正方形（規模）長軸5.82×短軸5.50m。確認面からの壁高55cm。（面積）現存30.91m²（方位）Ｎ－33°－Ｅ（覆土）Hr-FP、As-C、ローム土の混入率の違いにより４層に大別できる。3a層は焼土を含む。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（炉址）地床炉を１ケ所検出。F_1・長径75×短径65×深さ14cmの規模。（柱穴）６個検出。うち４個は主柱穴、貯蔵穴２個。（遺物）遺物は総数519点。赤井戸式の土器は３％、樽式系の土器は４％と少なく、石田川式土器で占められる。このうち10個体を図示した。混入の縄文土器が２点出土。（備考）古墳時代前期。

Ｈ－２号住居址（Fig. 10・19・24・25、PL. 6・13）

（位置）Ｘ131～133－Ｙ36～38Ｇ（形状）隅丸正方形（規模）長軸4.70×短軸4.31m。確認面からの壁高22cm。（面積）現存20.49m²（方位）Ｎ－28°－Ｅ（覆土）As-C、ローム土の混入率の違いにより３層に大別できる。２層はロームブロック20％含む。（床面）ほぼ全面に堅緻面が広がる。（炉址）地床炉を２ケ所検出。F_1・長径65×短径42×深さ８cmの規模で、炉縁石４個を検出。F_2・長径35×短径32×深さ７cmの規模。（柱穴）４個検出。主柱穴は３個検出できたが残りはカクラン内に存在する。南東隅に貯蔵穴。（周溝）全周する。（遺物）総数142点の遺物が出土した。赤井戸式の土器は１％、樽式系の土器は４％の割合と少なく石田川式土器で構成される。このうち６点を図示した。ほかに縄文土器２点、石器２点が出土。（備考）古墳時代前期。西側は水路、中央部の東側も掘削を受ける。

Ｈ－３号住居址（Fig. 11・19、PL. 6・13）

（位置）Ｘ134・135－Ｙ39～41Ｇ（重複）Ｗ－１とＨ－５の煙道部分に切られる。（形状）正方形（規模）長軸5.18×短軸4.81m。確認面からの壁高3.1cm。（面積）19.63m²（方位）Ｎ－39°－Ｗ（覆土）１層で、As-Cを10～20％含む褐色細砂層の１層により形成される。（床面）確認面が浅かったため床面の検出は困難を極めたが、部分的に堅緻面が存在した。粘土分布を２ケ所から検出。N_1は北側に分布し長径74×短径62cm×厚さ12cmを計る。南のN_2は長径44×短径40cm×厚さ７cmである。（炉址）１個検出。F_1は長径75×短径72cm×深さ14cm。（柱穴）１個検出した。貯蔵穴と考えられる。（遺物）総数164点。このうち赤井戸式の土器は32％と高比率を占め、樽式系は３％と少ない。このうち復原できた赤井戸式の台付甕を１個体図示した。ほかに混入の縄文土器５点が出土。（備考）古墳時代前期。

H－4号住居址（Fig. 12・20・25、PL. 6・7・13・14）

（位置）X132～134－Y40～42G（重複）H－5に切られる。（形状）隅丸正方形（規模）長軸5.78×短軸5.52m。確認面からの壁高31cm。（面積）現存29.90m²（方位）N－32°－W（覆土）3層に大別でき、As-C、ローム土等の混入度により6層に細分できる。3a層は炉址の上のため焼土を含む。（床面）南側の壁ぎわを除き堅緻面が広がる。地割れが北西から南東方向に長さ約181×最大幅12×深さ19屏cm存在。（炉址）地床炉を1ケ所検出。F_1・長径82×短径50×深さ12cmの規模。（柱穴）6個検出。主柱穴はP_1～P_4の4個、P_5が貯蔵穴である。（周溝）全周する。（遺物）総数259点の遺物が出土。このうち9個体を図示した。土器の割合は赤井戸式が7％、樽式系の土器が11％と比較的多かった。混入の縄文土器が35点出土。（備考）古墳時代前期。

H－5号住居址（Fig. 11・20・25、PL. 7・14）

（位置）X133・134－Y40～42G（重複）H－3とH－4を切る。（形状）長方形（規模）長軸4.46×短軸2.58m。確認面からの壁高20cm。（面積）推定12.55m²（方位）N－50°－E（覆土）As-C・Hr-FPの混入率の違いにより、4層に大別できる。4層は竈の粘土ブロックが30～40％入る。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。西壁中央部近くにコの字状に3個の編物石（104～106）を検出。（竈址）東壁中央南寄りに位置。主軸方向はN－54°－Eで、全長155cm、幅90cm。構築材に粘土を用いる。（柱穴）竈の南隣に貯蔵穴1個検出。（遺物）総数199点の遺物が出土した。土師器189点のうち、復原できた7個体を図示した。混入した縄文土器8点、石器類2点であった。（備考）古墳時代後期。

H－6号住居址（Fig. 13・14・20・21・25・26、PL. 8・9・13・14・15）

（位置）X135～137－Y41～43G（形状）長方形（規模）長軸6.59×短軸5.24m。確認面からの壁高46cm。（面積）32.30m²（方位）N－46°－E（覆土）6層に大別できる。2b層に6世紀初頭に榛名山より降下したHr-FAをブロック状に含む。（床面）ほぼ平坦であり、全面にわたって極めて堅緻な床面が広がる。住居址の西側に818年の地震による地割れ3本を検出。北東から南西方向に北から長さ約78×最大幅18cm、長さ約134×最大幅13cm、長さ約158×最大幅10cmで存在する。（馬蹄形施設）南壁際に浅い溝で区画を作出する。内部にP_7とP_8の2個の柱穴が存在する。（竈址）西壁中央に位置。主軸方向はN－45°－Eで、推定全長102cm、推定幅97cmを測る。構築材に粘土を用いる。支柱には本体に石を用い、その上に土器を使用。（柱穴）9個。4個の主柱穴を検出した。このうち、対角線上にあるP_2とP_4の底部には柱受けの粘土が貼られていた。貯蔵穴はP_5でありP_9は床下土坑である。（周溝）全周する。（遺物）総数686点の遺物が出土。土師器645点、須恵器9点、混入の縄文土器32点で構成される。図示した遺物は18個体である。（備考）Hr-FAを覆土に有する事から5世紀末葉の年代が当てられる。古墳時代後期。

H－7号住居址（Fig. 14・15・21・22・26、PL. 9・10・13・15）

（位置）X134～136－Y44～47G（形状）正方形（規模）長軸8.38×短軸8.30m。確認面からの壁高12cm。（面積）現存59.29m²（方位）N－63°－E（覆土）2層に大別できる。1a層に炭化材を含む。（床面）ほぼ平坦で、中央部に堅緻面が広がる。（炉址）地床炉1個検出。長径69×短径63×深さ16cm。（柱穴）主柱穴4個と貯蔵穴1個を確認。（遺物）総数781点の遺物が出土した。土師器771点、鉄器1点、金属製品1点、縄文土器が7点、石器類1点で構成される。図示したものは9個体。（備考）古墳時代中期。南東部分を公園造成前の道路に切られる。

H－8号住居址（Fig. 16・21・22、PL. 10・13・16）

（位置）X133・134－Y49・50G（形状）正方形（規模）長軸4.6×短軸(3.5)m。確認面からの壁高17cm。（面積）現存13.20m²（方位）N－76°－E（覆土）2層に大別できる。2層は炭化物を含む。（床面）ほぼ平坦であり、全面に堅緻面が広がる。（柱穴）主柱穴4個のうち3個が確認できた。残り1個は道路によって削平を受け存在しない。（周溝）調査した範囲では全周する。（遺物）総数137点の遺物が出土。内訳は土師器のほかに石器類3点、玉類1点である。6個体の土器を図示した。（備考）東壁に竈を有する事が考えられる。古墳時代後期。南東側は道路で削られて調査できなかった。

H－9号住居址（Fig. 16・22・23、PL. 10・11・16）

（位置）X135・136－Y51～53G（形状）長方形（規模）長軸5.10×短軸4.15m。確認面からの壁高23cm。（面積）19.31m²（方位）N－17°－W（覆土）により3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、床面はやわらかい。（柱穴）5個。主柱穴4個と柱穴1個を確認。（炉址）1個検出。長径64×短径55×深さ15cmの地床炉。（遺物）総数2134点の遺物が出土した。このうちの大半は住居址中央の覆土上半から廃棄された状態で出土している。時期的には後期の土器であった。鉄器・金属製品が2点出土。図示した遺物は廃棄された後期の土師器を含めて15個体である。（備考）古墳時代前期。

H－10号住居址（Fig. 17・23、PL. 11・16）

（位置）X134・135－Y51・52G（重複）W－2に切られる。（形状）正方形（規模）長軸4.28×短軸3.74m。確認面からの壁高16cm。（面積）現存10.97m²（方位）N－55°－E（覆土）Hr-FP、As-Cの混入率の違いにより3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、中央部に堅緻面が広がる。（炉址）3個検出。F_1は長径60×短径現存22×深さ14cm、F_2は長径44×短径25×深さ10cm、F_3は長径30×短径22×深さ8cmの地床炉。（遺物）総数600点の遺物が出土した。土師器のほかに縄文土器が1点、石器類3点が出土。このうち7個体を図示した。（備考）古墳時代中期。西北は道路により削平されていた。

2　土　　坑

D－1号土坑（Fig. 17、PL. 11）

（位置）X133－Y37G（形状）長径0.80×短径0.50×深さ0.43mで楕円形を呈する。（覆土）黒色土とローム土の混じりで1層。As-YPを含む。（備考）出土遺物はなかったが、覆土がJ－1号住居址の覆土と共通することから、縄文時代の所産といえる。

3　溝　状　遺　構

W－1号溝（Fig.17、PL. 11）

（位置）X132～135－Y39～41G（形状）溝の上部を削られているため、薬研掘の断面形を呈していないが、位置や大きさなどから昨年度調査のW－2号溝と接続する。溝の幅52～112cm、深さ22～54cmで、東西10.2mの長さで南に折れ曲がる。南北延長は10.2mを計る。（覆土）大きく2層に分けられる。（遺物）総数112点の遺物が出土したが全て混入品であった。（備考）中世の環濠（既出資料から14世紀代の所産）と考えられる。

W－2号溝（Fig.17、PL. 11）

（位置）X132～135－Y39～41G（重複）H－10を切る。（形状）断面は逆台形である。幅42～72cm、深さ13.5～32cm程度で、長さ6.5mを発掘調査する。（覆土）大きく3層に分けられる。（遺物）総数31点の遺物が出土したが住居址より流入したもの。（備考）時期を決定できる遺物がないが、覆土にAs-Bを含んでいないため、それ以前の所産か。

4　グリッド出土の遺物

淡色黒ボク土の上面にて遺構確認中に確認された縄文時代遺物の散布が少ないため、包含層としての特別な調査は実施しなかった。しかし、古墳時代の住居址に混入して縄文時代前期諸磯a式土器や中期の加曽利E 3～4式土器がわずかにみられた。石器も剝片類に留まっており、凹石1点を図示したに留まった。

Ⅵ　成果と問題点

1　縄　文　時　代

従来の調査によって、縄文時代の遺物について遺構を伴わない状態で多少検出されていた。内堀遺跡群Ⅰ（試掘調査）では、各所から縄文土器や石器が検出された。内堀遺跡群Ⅱにおいても

中期加曽利Ｅ式土器や後期堀之内式土器の出土が見られた。また、内堀遺跡群IIIにおいても前期から後期にいたる遺物が出土している。内堀遺跡群IVでも古墳時代より以前の調査は実施しなかったにもかかわらず、遺構確認作業で早期末葉から後期にいたる土器や石器が発見された。内堀遺跡群Ｖでは、ややまとまって土器と石器が検出されている。早期稲荷原式土器をはじめ新潟県を中心に分布をみせる三十稲場式土器の検出や後期堀之内式土器がまとまって検出された。内堀遺跡群VIでも早期末葉の土器をはじめ前期諸磯式土器や中期加曽利Ｅ式土器、後期堀之内式土器が検出されている。このように今まで土器や石器が確認されているにもかかわらず、遺構については土器を埋設した土坑を確認したに留まっていた。

今回の調査によって諸磯ａ式期の住居址を１軒検出することができた。北西部をＨ－１号住居址によって切られてはいたが、隅丸正方形の平面形をなし、長軸4.72m、短軸4.66mの規模で深さ55cmと明確な掘り込みを有する住居址である。床面はほぼ平坦に造成されていたが、中央部に黒色土による「貼り床」が存在するため、やや窪んでいた。この「貼り床」面には炉体土器を用いた１号炉と地床炉である２号炉の焼土が分布することから、「貼り床」形成→１・２号炉の使用といった変遷が考えられる。

この「貼り床」下の調査を行った所、１～３号床下土坑が検出された。１～３号床下土坑の３基がＵ字形に連結し存在している。１号床下土坑は大きく北側にオーバーハングしており長径1.2m、短径0.6mであり、床面からの深さ0.3mである。２号床下土坑は径0.8m、深さ0.5mである。西に存在する３号床下土坑はＨ－１号住居址の掘り方を観察する際に掘り上げてしまったものであるが、長径1.0m、短径0.9m、深さ0.5mを計る。これらの床下土坑の遺物は小片の土器が出土したに過ぎない。

さらに、床下土坑そのものはローム土と黒色土によって充塡されていたが、貼り床構築土には黒色土のブロックが用いられていた。このブロックが入る範囲は床面から10～20cm下までである。それ以上の深さには認められないことから意識的に床面を構築した結果ととらえられる。

以上の事から住居の構築にあたり、①床下土坑の掘削→②貼り床面形成→③炉の使用といった順番が考えられ、①の床下土坑の形成は住居の構築に含まれる行為としてとらえておきたい。また、住居で使用期間中の行為として床下土坑の形成も十分に考えられるが、いずれにしても床下土坑を住居とは全く別の遺構としてとらえることはできない。また、すでにあった土坑の直上に住居址を構築することも考え難い。

従来、縄文時代住居址内の土坑については、重複関係としてとらえる事が一般的であった。また、明確に貼り床が存在することも指摘されていなかった。しかし、今回の調査によって、古墳時代～平安時代の住居址で顕著に認められる床下土坑の存在が縄文時代においても存在することが明確となった。

今後、縄文時代の床下土坑の類似資料の増加を待って、その性格について解明しなければならない。また、多数検出されている古墳時代以降の住居址に存在する床下土坑との関連性について

も言及する必要がある。現時点では、住居址構造を探る上で貴重な調査事例となった点を指摘しておくに留めたい。

2　古　墳　時　代

古墳時代の遺構として、古墳時代前期の住居址５軒、中期の住居址２軒、後期の住居址３軒を調査することができた。すでに調査した住居址と合わせると、前期が住居址104軒、中期の住居址が５軒、後期の住居址11軒となった。調査した範囲で占地をみていくと前期の住居址は標高137.25mの「流れ山」の頂上部から今回調査した標高129mの平坦地まで広範囲に広がりをみせる。その範囲は東西で200mを超える。さらに南北も北の沖積地に広がる下縄引Ⅰ遺跡の集落と本遺跡の集落は同一の集落になる可能性が高いため、東西と同様200mを超える範囲になるものと思われ、更に東に区域が延長されるものと思われる。それに比較して中期や後期の集落の区域は東側に偏った傾向がみられる。しかし、「風のわたる丘【流れ山】」から東に延びる斜面については発掘調査を実施しているが、西に存在するもう一つの「流れ山」である五料山の西斜面や南斜面にも多くの住居址が存在するため、中・後期の住居址は今後その数が増えるものと期待される。

内堀遺跡群Ⅳの報告書で前期の住居址から出土した土器破片のうち容易に識別が可能なものとして５種類に分類した。それは、縄文施文の破片（赤井戸式）、櫛描文の破片（樽式系）、Ｓ字状口縁台付甕片、赤色塗彩の破片、その他である。この５種類の割合についてグラフにしたところ構成比が変移していく結果が認められた。しかし、住居址から出土した土器がその住居址で使用されたものではなく他の住居から廃棄行為によって存在することも考えられたが、その行為があったとしても時間幅はそう大きいものではなく限定されるものと考えて作業を進めた。さらに４世紀中葉に降下したAs-Cも幾つかの住居址で検出されたため、テフラとのクロスチェックも行った。テフラによって埋没している住居址と土器構成比との矛盾はみられなかったため、さらに住居址形態や柱穴、炉、貯蔵穴などの付属施設との検討を行った結果にも共通性が見出せた。

その結果については内堀遺跡群Ⅳですでに述べてあるのでここでは記述しないが、本遺跡の４世紀代の住居址について大きく３時期に分類を行った。その分類に従えば、Ｈ－３・４号住居址がⅡ期、Ｈ－１・２・９号住居址がⅢ期に該当する。

古墳時代前期の住居址の構造については、『内堀遺跡群Ⅳ』の中で指摘した傾向が認められる。住居の平面形はほぼ正方形を呈し、主柱穴は４本柱が主流をしめる。Ｈ－３号は主柱穴が検出できなかった。

中期の住居址の平面形は大きさに差があるが、ほぼ正方形を呈し、主柱穴は４本で、炉址を１箇所有している。

後期の住居址の竈は、Ｈ－５号は東壁の南コーナーよりに確認された。Ｈ－８号は南東の約半分の部分を公園造成前の道路により切られていて竈を検出できなかったが、東壁にあったものと推定される。

Ｈ－６号は北壁の中央部に竈が確認された。竈が北壁（北西方向）で確認されたのは内堀遺跡群のなかでは初めてである。季節風の影響を考えると、季節により使い分けが行われていたのか、特別な意味をもつ住居址なのか今後に課題を残すものとなった。

竈の構築は粘土を主体としてなされていた。Ｈ－６号の竈の支柱には土器が使用され、土器の下には石が置かれていた。

Ｈ－６号からは弘仁９年（818年）の地震による地割れが南北方向に３条確認され、また、覆土からは６世紀初頭の榛名山の噴火による火山灰（Hr-ＦＡ）が確認された。柱穴の底には粘土が貼られていた。これは昨年度までは、Ⅲ期とⅣ期（５世紀初頭）に限って施工された技法であったが、Ⅴ期にまで認められた。須恵器無蓋高杯が出土し、ＴＫ－47に比定できることから５世紀後半に位置付けられ、前二子古墳と近接した時期といえる。

３　中　　世

中世の遺構として、平成５年度に確認された溝Ｗ－２号に方向と覆土から接続すると考えられる溝Ｗ－１号を検出した。このＷ－１号の検出によって、環濠の範囲を確定できた。

Ｗ－１号の溝の上部は削られており、薬研掘の形は呈していないが、Ｘ134－Ｙ39Ｇでほぼ直角に曲がり、東西方向に長さ10.7m、南北方向に10.2m、幅52～112cm，深さ22～54cmで確認された。しかし、昨年度の溝Ｗ－３号に接続すると思われる溝は検出されなかった。五料沼に水を引き込む水路によって後世に削られている。環濠の南東部の範囲については今後の検討を有する。

平成２年度の溝Ｗ－９号、昨年度のＷ－２・３・12・13号から範囲を考えると、北辺約108m、南面約89m、西辺約45m、東辺の北側約10mとなり、東西方向に細長い台形を想起させる。

覆土からノロやラミナ状の堆積は全く見られず、水が流れた形跡はない。これは、溝が空堀であったことを端的に物語っており、昨年度までの調査結果とも一致している。

堀の方向は、北辺は東方向より12度北に、南辺はＷ－３号は東方向より約33度北に、Ｗ－13号では東方向より約25度北に向いている。西辺は座標北方向より約11度西に向いている。東辺は座標北より約15度南に向いている。現地形で北西方向から南東方向にかけて緩やかな傾斜をもって下っている。南は低く谷地（現在は五料沼）になっていることを考慮すると堀の方向のズレは地形に制約されたものと推定される。

今年度の調査では、出土遺物は土師器等があるが、他の時代の混入品である。重複している遺構は環濠によって切られ、環濠より古いものと考えられる。環濠と同時代の遺構は確認できなかった。

昨年度までの調査結果とあわせ、本遺構は、防御を旨とするには幅や深さが県内の遺構より小さく、役にたたないと思われる。また、周辺に付属施設がないことから自立農民層の館跡と推定でき、出土遺物から14世紀代の所産と考えられる。

県内の館跡については、『内堀遺跡群Ⅵ』に詳しく述べているのでそれを参照していただきたい。

参 考 文 献

桑原　昭・園部守央　1988　『内堀遺跡群』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
園部守央・加部二生　1989　『内堀遺跡群II』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
園部守央・鈴木雅浩　1990　『内堀遺跡群III』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前原　豊・伊藤　良　1991　『内堀遺跡群IV』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
伊藤　良・前原　豊・戸所慎策　1993　『内堀遺跡群V』　前橋市教育委員会
関口　孝・前原　豊・戸所慎策　1994　『内堀遺跡群VI』　前橋市教育委員会
飯塚　誠・杉浦つや子ほか　1981　『西大室遺跡群II』　前橋市教育委員会
加部二生・前原　豊「内堀遺跡群下縄引遺跡」『東日本における古墳出現過程の検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
江部和彦・前原照子ほか　1983　『西大室遺跡群IV』前橋市教育委員会
千田幸生ほか　1986　『梅木遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
小島純一　1985　『深津地区遺跡群 昭和60年度』　群馬県粕川村教育委員会
小島純一　1986　『深津地区遺跡群 昭和61年度』　群馬県粕川村教育委員会
小島純一ほか　1987　『粕川村の遺跡』　群馬県粕川村教育委員会
小島純一　1988　『堤頭遺跡』　群馬県粕川村教育委員会
小島純一　1990　『西迎遺跡』　群馬県粕川村教育委員会

Tab. 2　遺物観察表

番	出土位置	器　形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備　考
1	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③浅黄④口縁部⑤半截竹管による連続爪形文で平行、弧線文。		175ほか	諸磯ａ式
2	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③橙④口縁部⑤円管文。半截竹管による木の葉文風の連続爪形文。		71ほか	諸磯ａ式
3	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③橙④口縁部⑤半截竹管による連続爪形文と隆帯に刻み。		29ほか	諸磯ａ式
4	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③橙④胴部⑤半截竹管による連続爪形文。		229ほか	諸磯ａ式
5	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③明赤褐④口縁部⑤連続爪形文による横位と弧線文。		145ほか	諸磯ａ式
6	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③浅黄④口縁部⑤半截竹管による連続爪形文。隆帯に刻み。斜めの平行沈線文。		183ほか	諸磯ａ式
7	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③明赤褐④口縁部⑤半截竹管による連続爪形文・綾くり文・縄文ＲＬ。５と同一個体。		115ほか	諸磯ａ式
8	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③浅黄④口縁部⑤半截竹管による連続爪形文と斜めの刻みが交互に入る。楕円形の孔。		111ほか	諸磯ａ式
9	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③明黄褐④口縁部⑤半截竹管による連続爪形文で横位、三角が描かれる。		７ほか	諸磯ａ式
10	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③橙④口縁部⑤半截竹管による連続爪形文で横位、弧線が描かれる。		123ほか	諸磯ａ式
11	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③橙④口縁部⑤半截竹管による連続爪形文と隆帯に刻み。３と同一個体。		36ほか	諸磯ａ式
12	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③橙④口縁部⑤半截竹管による４条１単位の平行沈線との刺突、円管文。		103	諸磯ａ式
13	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③浅黄④口縁部⑤半截竹管による平行沈線文。隆帯に縄文ＲＬ。		113	諸磯ａ式
14	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③橙④口縁部⑤半截竹管による平行沈線文。		294	諸磯ａ式
15	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③浅黄④口縁部⑤円孔文と半截竹管による平行沈線形文。		337	諸磯ａ式
16	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③浅黄④胴～底部⑤縄文ＲＬ。半截竹管による平行沈線文と連続爪形文。		80	諸磯ａ式
17	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③浅黄④口縁部部⑤半截竹管による横位と斜めの平行沈線文。		Ｈ－１	諸磯ａ式
18	J－1	縄文深鉢			①細粒②良好③明黄褐④胴部⑤縄文ＲＬ。半截竹管による平行沈線文。		132	諸磯ａ式
19	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③明黄褐④胴部⑤縄文ＲＬ。円管文。半截竹管による平行沈線。		96ほか	諸磯ａ式
20	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③明赤褐④胴部⑤縄文Ｒ		106ほか	諸磯ａ式
21	J－1	縄文深鉢			①中粒②良好③橙④胴部⑤縄文Ｌ		65ほか	諸磯ａ式
22	J－1	石器	石匙①5.9②7.8③1.3④37.6g⑤完形⑥頁岩				22	
23	H－1	甕	[13.6]	(14.0)	①細粒②良好③橙④1/4	外面刷毛目、ナデ。内面横ナデ。	423ほか	
24	H－1	甕	[14.0]	(7.1)	①細粒②良好③橙④口縁2/3	外面横ナデ、ナデ。内面横ナデ。	277ほか	
25	H－1	甕	――	17.0	①中粒②良好③明褐④1/3	外面篦磨き。内面ナデ。	295ほか	
26	H－1	高杯	――	(6.7)	①細粒②良好③橙④脚部	外面篦磨き。内面ナデ。	409	
27	H－1	高杯	――	(5.0)	①中粒②良好③明赤褐④破片	外面篦磨き。内面ナデ。杯部内面７個の刺突痕	57	
28	H－1	台付甕	――	(5.1)	①細粒②良好③明黄褐④脚部	外面篦削り、ナデ。内面ナデ。	426	
29	H－1	台付甕	――	(30.0)	①中粒②良好③にぶい橙④3/4	外面刷毛目。内面横ナデ、ナデ。	407ほか	
30	H－1	台付甕	――	(7.5)	①細粒②良好③にぶい橙④脚部1/3	外面刷毛目、ナデ。内面ナデ。	287ほか	
31	H－2	器台	(7.8)	(4.3)	①細粒②良好③明赤褐④1/2	外面篦磨き、ナデ。内面篦磨き、ナデ。	108	
32	H－2	坩	12.5	5.5	①中粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	外面横ナデ、篦磨き。内面刷毛目。	96ほか	
33	H－2	坩	9.8	14.6	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	外面篦磨き。内面ナデ。	90	
34	H－3	台付甕	12.3	21.0	①粒②良好③にぶい黄橙④3/4	外面口縁～肩部縄文ＲＬ。胴部～脚部ナデ。内面ナデ。	18ほか	赤井戸式
35	H－4	甕	14.5	27.3	①粒②良好③橙④ほぼ完形	外面口縁部輪積み痕、指押さえ。肩部波状文、胴部篦磨き。内面横ナデ。	88	
36	H－4	台付甕	[8.0]	10.0	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外面口縁部縄文ＬＲ、磨き。内面横ナデ、ナデ	20	赤井戸式
37	H－4	杯	12.5	5.3	①中粒②良好③赤褐④ほぼ完形	内外面とも篦磨き、ナデ。	89	赤色塗彩
38	H－4	器台	――	(7.7)	①中粒②良好③橙④脚部	外面篦磨き。透孔４単位。内面篦磨き。	46	
39	H－4	器台	――	(7.1)	①中粒②良好③橙④脚部1/2	外面篦磨き。透孔４単位。内面篦磨き。	25	
40	H－4	台付甕	13.3	(12.0)	①中粒②良好③橙④口縁～胴部	外面口縁部波状文、口縁～肩部刷毛目、篦磨き内面篦磨き。	92	樽式系
41	H－4	手捏土器	5.1	2.5	鉢形土器①細粒②良好③明赤褐④完形	内外面ともナデ。	220	
42	H－5	石製品	砥石①5.7②4.1③3.6④111.0⑤流紋岩⑥完形				61	
43	H－5	杯	[14.7]	(3.2)	①細粒②良好③にぶい橙④破片	内外面とも横ナデ。	70	
44	H－5	杯	[12.0]	(3.3)	①細粒②良好③明赤褐④口縁1/3	内外面とも横ナデ、ナデ。	114	
45	H－5	甕	(15.2)	(12.6)	①粗粒②良好③にぶい橙④口縁～胴部2/3	外面篦削り、横ナデ、ナデ。内面刷毛目、ナデ	10ほか	
46	H－6	甕	――	(23.7)	①中粒②良好③橙④1/4	外面篦磨き。内面ハクラク。	516	
47	H－6	須恵器	[13.0]	8.5	無蓋高杯①細粒②良好③灰④1/2	外面回転ヘラ削り。内面轆轤ナデ。	666ほか	TK47期

番	出土位置	器　形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備　考
48	H－6	石製模造品	剣形品①2.9②1.9③0.5④4.0g⑤緑色片岩⑥完形				538	
49	H－6	石製模造品	剣形品①3.2②1.9③0.5④4.4g⑤緑色片岩⑥完形				637	
50	H－6	杯	[14.6]	(4.0)	①細粒②良好③にぶい褐④1/4	外面篦削り。内面横ナデ、ナデ。	98ほか	内面黒色
51	H－6	杯	[11.1]	(3.7)	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/2	外面ナデ。内面横ナデ。	107ほか	
52	H－6	杯	[3.8]	5.8	①中粒②良好③橙④4/5	外面口縁、横ナデ、篦削り後軽いナデ。内面ハクラク	687ほか	
53	H－6	杯	[13.8]	5.5	①細粒②良好③明赤褐④1/2	外面横ナデ、ナデ、篦削り。内面横ナデ。	250ほか	
54	H－6	杯	12.0	5.6	①細粒②極良③橙④完形	外面横ナデ、ナデ、篦削り。内面横ナデ、暗紋	352	
55	H－6	杯	[12.3]	5.3	①中粒②良好③橙④1/3	外面口縁、横ナデ、ヘラ削り後軽いナデ内面ナデ、放射状の暗紋。	467ほか	
56	H－6	杯	[12.6]	(3.7)	①細粒②極良③明赤褐④口縁部1/4	内外面とも横ナデ。	630ほか	
57	H－6	高杯	――	(7.3)	①細粒②良好③明赤褐④脚部	外面ナデ。内面横ナデ、ナデ。	454	
58	H－6	須恵器	[10.0]	(2.0)	瓶形土器①細粒②極良③黄灰④破片	外面回転轆轤ナデ、波状文。内面轆轤ナデ。	451	
59	H－6	甕	―	12.2	①中粒②良好③赤褐④底部	外面ナデ。内面刷毛目。	514	
60	H－7	甕	20.2	33.2	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	内外面とも横ナデ、ナデ。	26ほか	
61	H－7	椀	11.2	6.0	①細粒②良好③浅黄橙④4/5	外面篦削り、ナデ。内面横ナデ、ナデ。	243ほか	
62	H－7	青銅製品	責金具①4.1②2.4③1.6④24.0g⑤完形				1	
63	H－7	甕	――	(19.0)	①中粒②良好③明黄褐④底部のみ	外面刷毛目、篦磨き。内面刷毛目、篦磨き。	733ほか	
64	H－7	甕	[16.3]	26.0	①粗粒②良好③にぶい赤褐④1/2	外面横ナデ、指押さえ。内面ナデ、指おさえ。	288ほか	
65	H－8	手捏土器	4.5	3.5	甑形土器①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面横ナデ、篦磨き。内面ナデ、指おさえ。	2	
66	H－8	杯	[11.0]	(4.0)	①細粒②良好③橙④破片	内外面とも横ナデ。	59ほか	
67	H－8	石製品	砥石①9.8②6.7③5.0④369.0g⑤完形流紋岩⑥流紋岩				28	
68	H－8	石製品	勾玉①1.8②1.2③0.6④1.4g⑤完形⑥滑石				1	
69	H－8	甕	[17.5]	(22.5)	①粗粒②良好③明褐④2/3	外面篦削り。内面横ナデ、ナデ。	34ほか	
70	H－8	甕	[16.5]	(12.6)	①中粒②良好③橙④口縁～胴部1/3	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	50ほか	
71	H－9	坩	[10.6]	(4.5)	①中粒②良好③にぶい橙④破片	内外面とも横ナデ。	220	
72	H－9	坩	[10.0]	(5.7)	①中粒②良好③明赤褐④破片	外面横ナデ、篦磨き。内面横ナデ。	表採	
73	H－9	坩	[10.2]	7.5	①細粒②良好③橙④1/3	外面刷毛目、ナデ。内面横ナデ。	1152ほか	
74	H－9	台付甕	11.0	(15.5)	①細粒②良好③黄橙④脚部欠損	内外面とも横ナデ、刷毛目。	300ほか	
75	H－9	杯	[13.5]	(5.3)	①細粒②良好③橙④1/4	内外面とも横ナデ。	767ほか	
76	H－9	杯	[12.0]	4.9	①細粒②良好③橙④1/4	内外面とも横ナデ、ナデ、篦磨き。	773ほか	
77	H－9	杯	[14.0]	(4.8)	①細粒②良好③橙④1/3	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ、暗紋	221ほか	
78	H－9	杯	[14.6]	(5.0)	①中粒②良好③明赤褐④破片(口縁)	外面横ナデ、ナデ、磨き。内面横ナデ。	1521ほか	
79	H－9	杯	[12.6]	(4.0)	①細粒②良好③明赤褐④1/5	外面横ナデ、ナデ、磨き。内面横ナデ。	695ほか	
80	H－9	杯	(15.2)	(6.1)	①中粒②良好③明赤褐④破片1/5	外面横ナデ、ナデ、削り。内横ナデ、ナデ。	351ほか	
81	H－9	甕	14.1	13.4	①中粒②良好③にぶい橙④2/3	内外面とも横ナデ、ナデ。	175ほか	
82	H－9	高杯	――	(11.2)	①細粒②良好③褐④脚部	外面ナデ、指おさえ。内面ナデ。	152ほか	
83	H－9	壺	――	(12.5)	①中粒②良好③橙④底部	内外面とも篦磨き、ナデ、刷毛目。	421ほか	
84	H－9	坩	[12.0]	(5.9)	①細粒②良好③橙④口縁破片	外面横ナデ、ナデ、篦磨き。内面横ナデ。	850	
85	H－9	椀	[11.6]	(5.6)	①中粒②良好③橙④1/6	内外面とも横ナデ。	839ほか	
86	H－10	甕	12.6	(7.6)	①細粒②良好③にぶい橙④口縁部のみ	内外面とも横ナデ、ナデ。	321	
87	H－10	杯	[17.7]	(4.0)	①中粒②良好③橙④破片	外面横ナデ、ナデ、篦磨き。内面横ナデ。	202ほか	
88	H－10	壺	9.7	(8.7)	①中粒②良好③橙④口～肩1/2	内外面とも横ナデ、ナデ。	353ほか	
89	H－10	壺	10.4	(7.5)	①細粒②良好③明赤褐④口縁部のみ	内外面とも横ナデ、ナデ、磨き。	304ほか	
90	H－10	椀	[11.0]	(5.5)	①細粒②良好③黄橙④1/5	内外面とも横ナデ、ナデ。	212	
91	H－10	杯	[14.0]	(7.4)	①中粒②良好③橙④1/3	外面横ナデ、ナデ。内面磨き。	311ほか	
92	H－10	甕	[19.5]	(16.0)	①細粒②良好③明黄褐④口縁1/3	内外面とも横ナデ、ナデ。	341ほか	
93	J－1	石器	磨石①11.9②10.6③7.4④1400.0g⑤完形⑥粗粒安山岩（全面使用）				215	
94	J－1	石器	蜂巣石①23.5②16.7③8.7④4200.0g⑤完形⑥粗粒安山岩（２面使用）				335	
95	J－1	石器	凹石①10.0②6.7③2.8④210.0g⑤完形⑥粗粒安山岩（２面使用）				288	

番	出土位置	器　形	大きさ 口径　　器高	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備　考
96	J－1	石器	凹石①9.6②7.8③5.9④450.0g⑤完形⑥粗粒安山岩（4面使用）			243	
97	H－1	石器	磨石①8.0②5.6③5.5④360.0g⑤完形⑥安山岩（全面使用）J－1より混入。			452	
98	H－1	石器	凹石①11.2②8.6③6.8④700.0g⑤完形⑥粗粒安山岩（2面使用）			覆土	
99	H－2	石器	磨石①11.7②9.2③7.7④600.0g⑤一部欠損⑥安山岩			覆土	
100	H－2	石器	台石・敲石①20.1②15.1③5.9④3050.0g⑤熱によるハジケ⑥頁岩（台石は2面使用）			19	
101	H－2	石器	砥石・磨石①12.6②10.1③4.3④600.0g⑤完形⑥粗粒安山岩（2面使用）			覆土	
102	H－4	石器	磨石①10.4②7.8③6.2④750.0g⑤完形⑥安山岩（全面使用）			98	
103	H－4	石器	磨石①9.4②5.9③3.9④400.0g⑤完形⑥頁岩（先端使用）			172	
104	H－5	石器	編物石①12.9②5.9③4.2④460.0g⑤完形⑥安山岩			A	
105	H－5	石器	編物石①15.1②6.4③4.0④600.0g⑤完形⑥安山岩			B	
106	H－5	石器	編物石①14.8②7.6③4.3④630.0g⑤完形⑥頁岩			C	
107	H－6	石器	砥石①11.3②11.0③6.6④470.0g⑤完形⑥軽石（2面使用）			260	
108	H－6	石器	敲石①9.2②7.0③6.1④500.0g⑤完形⑥粗粒安山岩（2カ所使用）			142	
109	H－6	石器	敲石①14.0②5.7③6.3④610.0g⑤完形 ⑥粗粒安山岩（4カ所使用）			102	
110	H－6	石器	砥石①12.6②11.5③7.2④1000.0g⑤一部欠損⑥粗粒安山岩（2面使用）			659	
111	H－7	石器	砥石①16.7②10.6③9.1④1520.0g⑤完形⑥粗粒安山岩（4面使用・先端使用）			600	
112	H－7	石器	砥石①7.3②7.2③4.5④100.0g⑤完形⑥軽石（磨面と砥石、砥石2面使用）			812	
113	H－7	石器	砥石①13.0②5.9③1.2④120.0g⑤完形⑥砂岩（2面使用、側面研磨）			683	
114	H－7	石器	敲石①9.6②11.3③5.2④460.0g⑤一部欠損⑥安山岩（縄文時代の礫器の転用品か）			601	
115	X136-X37G	石器	凹石・磨石①12.1②7.8③3.8④550.0g⑤一部欠損⑥粗粒安山岩（凹み2面使用）			覆土	

註）1．縄文土器の観察項目は、①胎土②焼成③色調④残存⑤文様・整形方法の順で記載した。

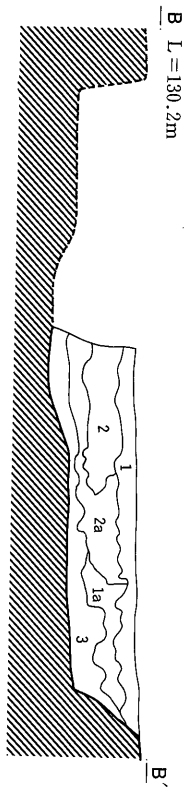
2．玉・土製品・石器・石製品の観察項目は、①最大長②最大幅③最大厚④重さ⑤残存⑥石材の順で記載した。

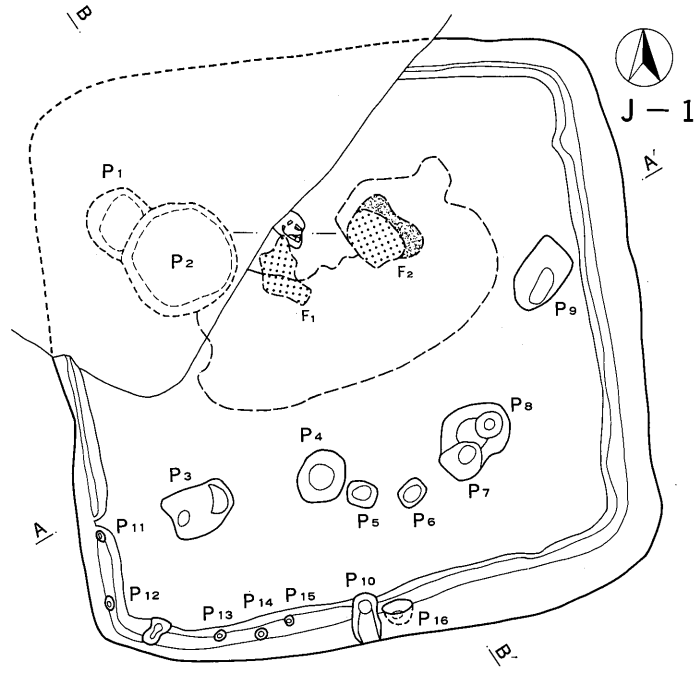
3．①胎土は細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合には鉱物名を記載。

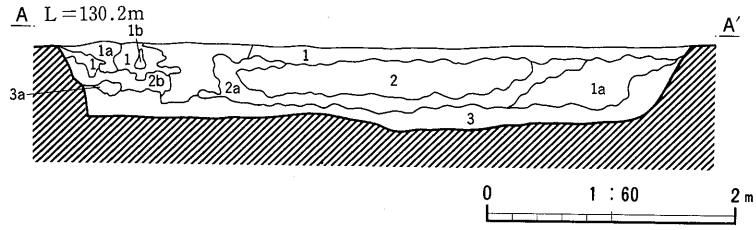
②焼成は極良、良好、不良の3段階評価。

③色調は土器外面を観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によった。

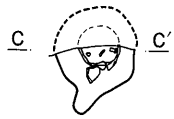
④大きさの単位はcm、gであり、現存値を（　）、復元値［　］で示した。その他の小片については所属部位を記載した。

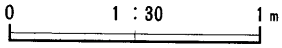






埋設土器





J－1号住居址埋設土器層序説明

1層　褐色微砂層。

2層　黄褐色微砂層。

J－1号住居址層序説明

1層　暗褐色細砂層。As-YPを20%含む。

1a層　褐色微砂層。ローム土主体。

1b層　暗褐色細砂層。黒色土主体

2層　黒褐色細砂層。As-YPを20%含む。黒色土主体。

2a層　にぶい黄褐色細砂層。As-YPを30%含む。

2b層　褐色細砂層。As-YPを10%含む。

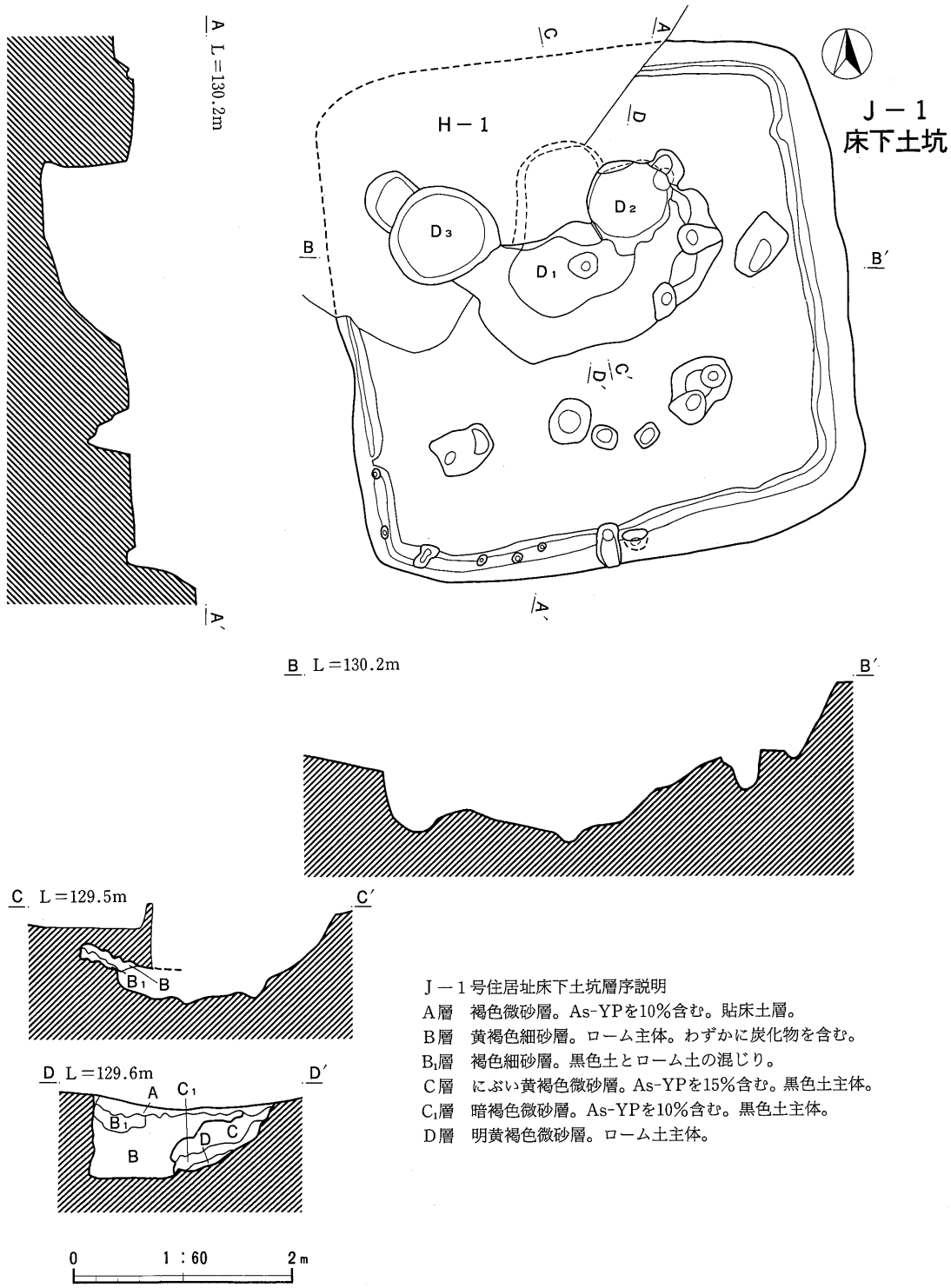
3層　黄褐色細砂層。As-YPを20%含む。ローム土主体。

3a層　黄褐色細砂層。ロームブロック含むローム土主体。

J－1　柱穴一覧

No	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	52	50	40	
P_2	円　形	86	86	41	
P_3	隅丸長方形	50	39	30	
P_4	円　形	42	36	37	
P_5	円　形	23	18	19	
P_6	円　形	23	18	19	
P_7	不整形	34	37	84	
P_8	円　形	52	42	63	
P_9	長方形	55	36	33	
P_{10}	長方形	40	22	68	
P_{11}	円　形	9	6	5	
P_{12}	円　形	11	6	6	
P_{13}	円　形	10	7	4	
P_{14}	円　形	10	8	4	
P_{15}	円　形	7	6	3	
P_{16}	円　形	24	10	—	

Fig. 7　J－1号住居址



J－1号住居址床下土坑層序説明

A層　褐色微砂層。As-YPを10%含む。貼床土層。

B層　黄褐色細砂層。ローム主体。わずかに炭化物を含む。

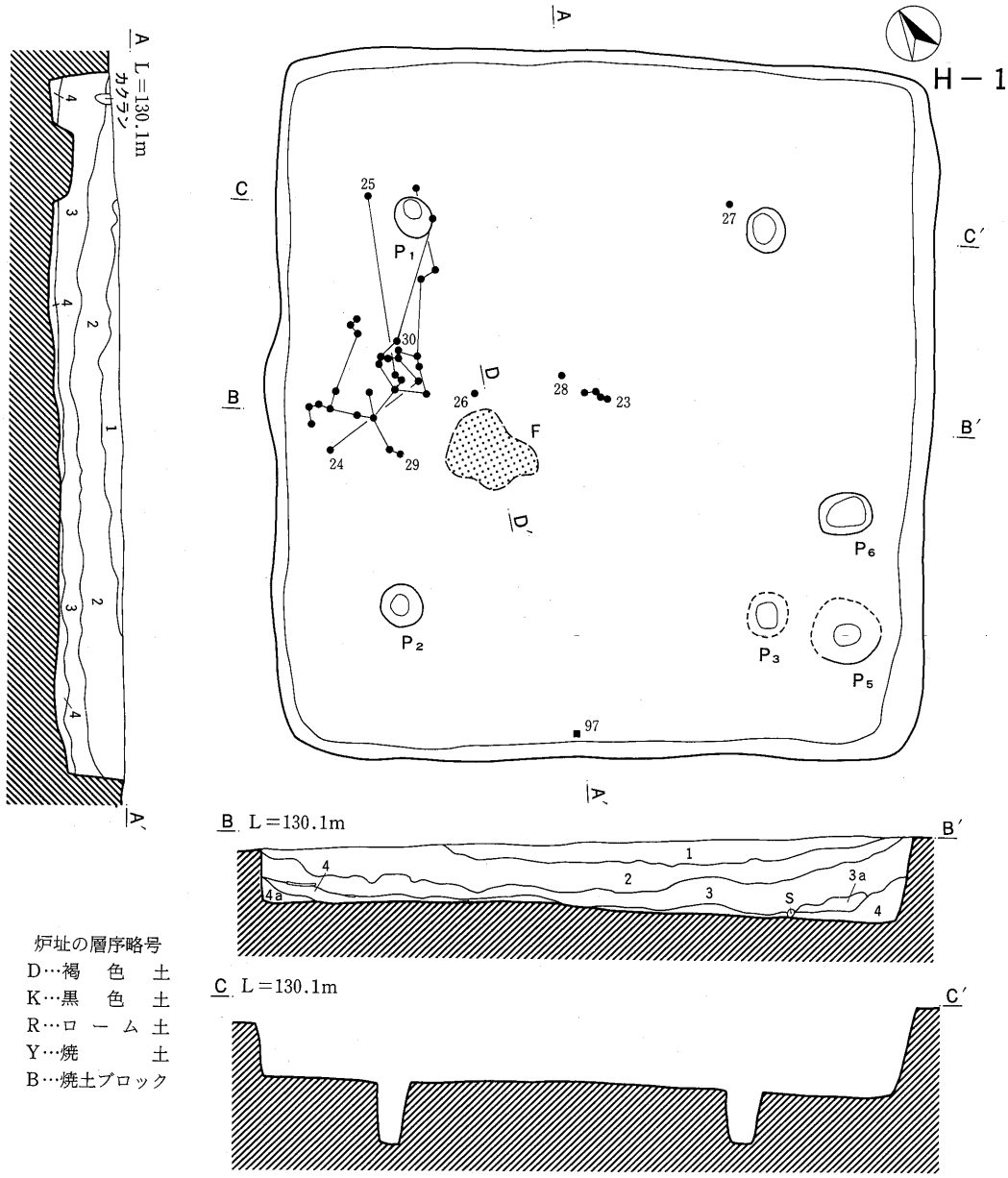
B_1層　褐色細砂層。黒色土とローム土の混じり。

C層　にぶい黄褐色微砂層。As-YPを15%含む。黒色土主体。

C_1層　暗褐色微砂層。As-YPを10%含む。黒色土主体。

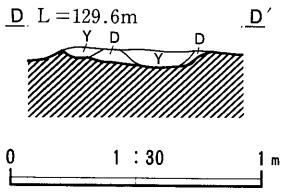
D層　明黄褐色微砂層。ローム土主体。

Fig. 8　J－1号住居址



炉址の層序略号
D…褐　色　土
K…黒　色　土
R…ロ　ー　ム　土
Y…焼　　土
B…焼土ブロック

0　1：60　2m



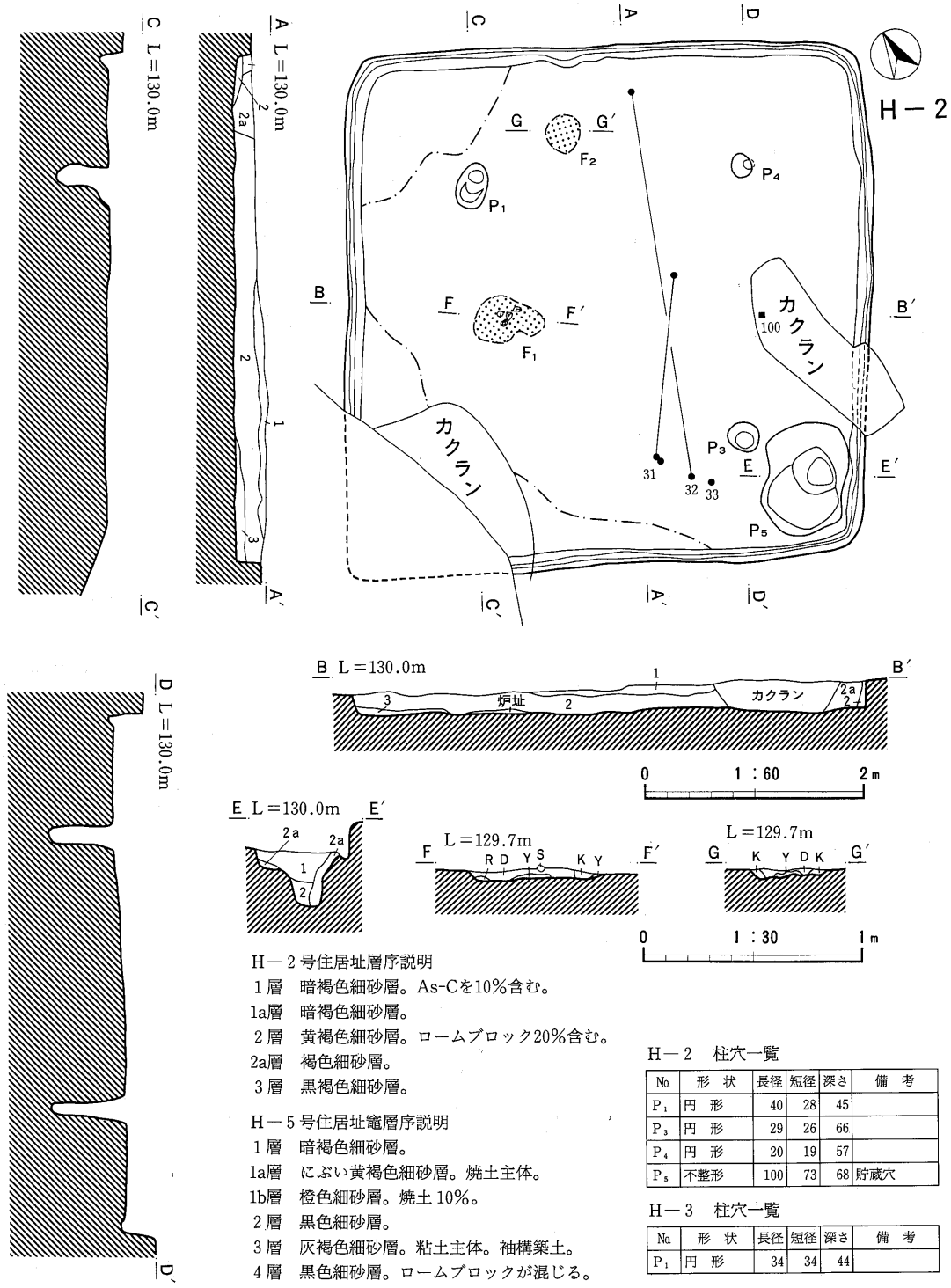
H－1号住居址層序説明

1層　黒褐色細砂層。Hr-FPを、As-Cを20～25％含む。
2層　にぶい黄褐色微砂層。
3層　黄褐色細砂層。
3a層　黄褐色細砂層。焼土7％含む。
4層　褐色微砂層。
4a層　明巷褐色微砂層。ローム土60％含む。

H－1　柱穴一覧

No	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	32	28	49	
P_2	円　形	36	34	29	
P_3	―	(36)	(34)	42	
P_4	円　形	36	32	42	
P_5	―	(56)	(56)	50	
P_6	長方形	44	32	19	

Fig. 9　H－1号住居址



H－2号住居址層序説明

1層　暗褐色細砂層。As-Cを10%含む。
1a層　暗褐色細砂層。
2層　黄褐色細砂層。ロームブロック20%含む。
2a層　褐色細砂層。
3層　黒褐色細砂層。

H－5号住居址竈層序説明

1層　暗褐色細砂層。
1a層　にぶい黄褐色細砂層。焼土主体。
1b層　橙色細砂層。焼土10%。
2層　黒色細砂層。
3層　灰褐色細砂層。粘土主体。袖構築土。
4層　黒色細砂層。ロームブロックが混じる。

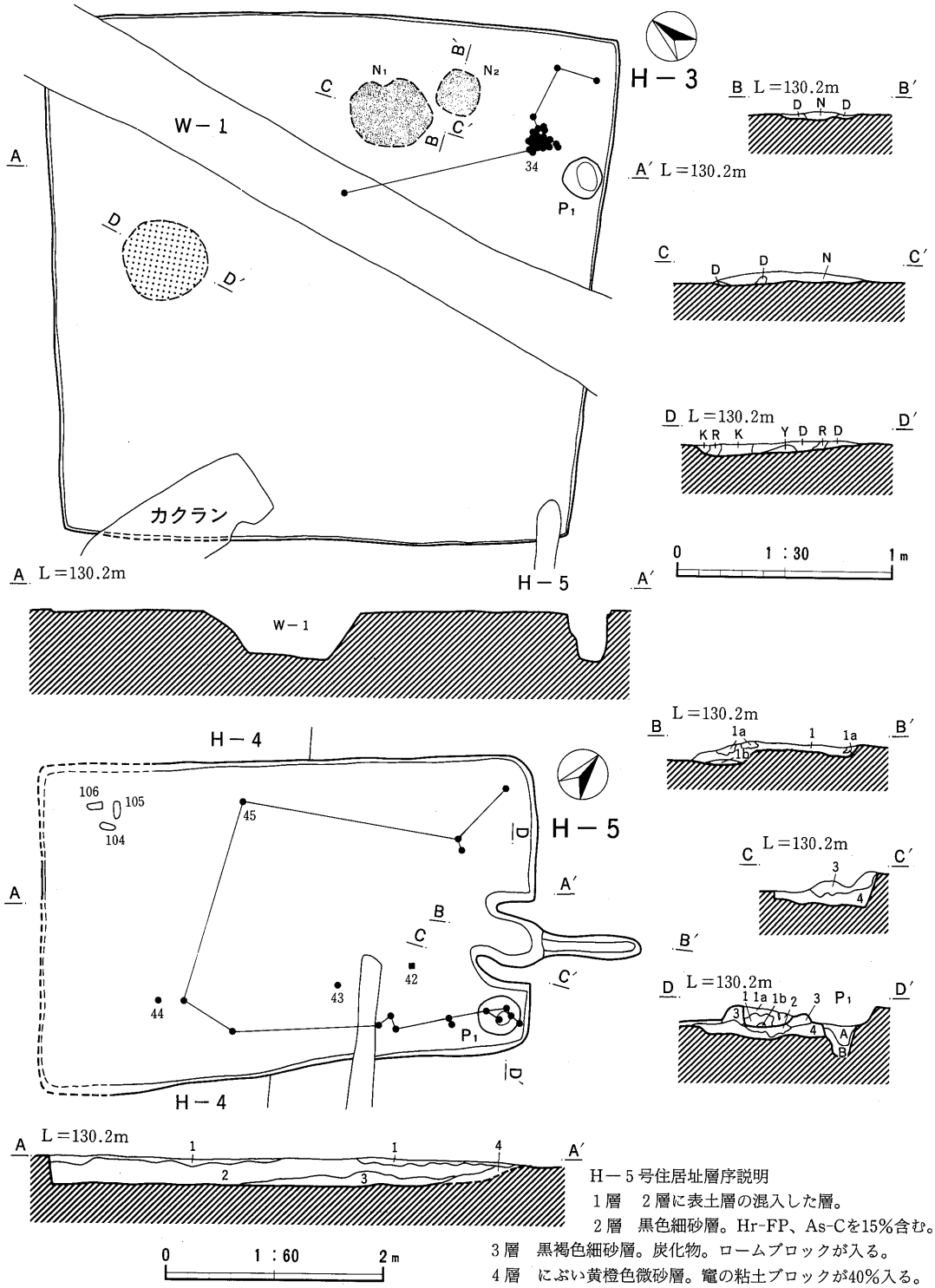
H－2　柱穴一覧

No.	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	40	28	45	
P_3	円　形	29	26	66	
P_4	円　形	20	19	57	
P_5	不整形	100	73	68	貯蔵穴

H－3　柱穴一覧

No.	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	34	34	44	

Fig. 10　H－2号住居址



H－5号住居址層序説明

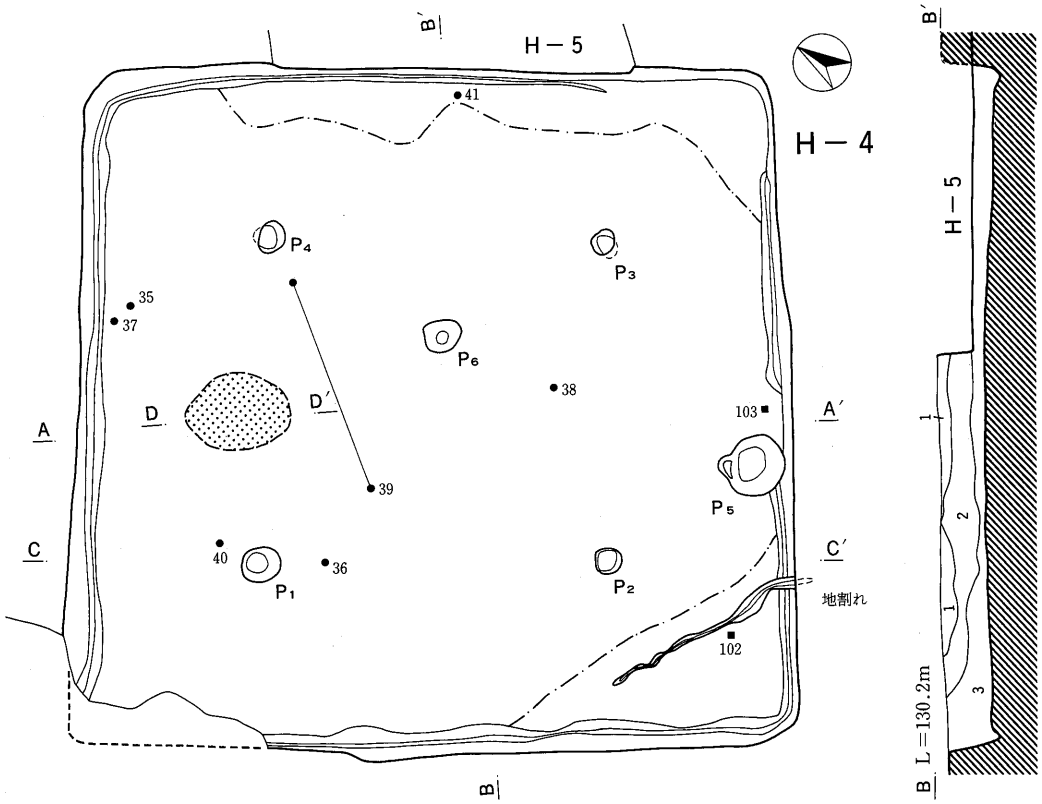
1層　2層に表土層の混入した層。

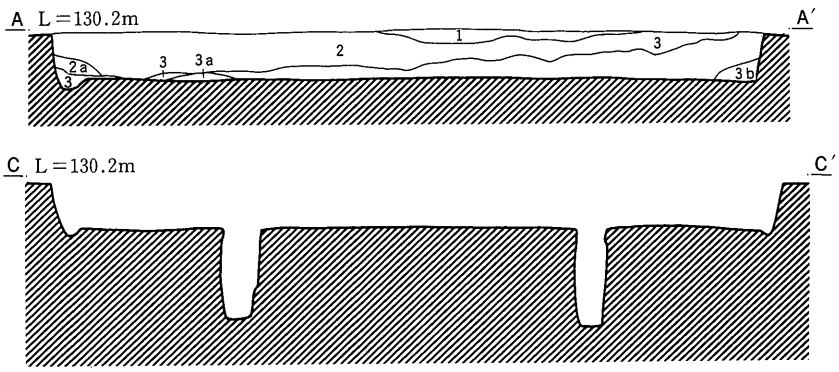
2層　黒色細砂層。Hr-FP、As-Cを15%含む。

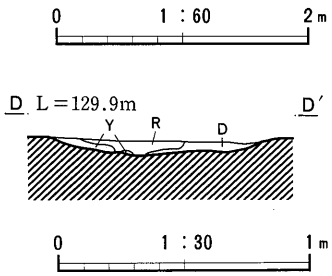
3層　黒褐色細砂層。炭化物。ロームブロックが入る。

4層　にぶい黄橙色微砂層。竈の粘土ブロックが40%入る。

Fig. 11　H－3・5号住居址







H－4号住居址層序説明

1層　2層に耕作土が混入した層。

2層　にぶい黄褐色細砂層。As-Cを30～40％含む。

2a層　基本的には2層。2層よりAs-Cが少ない。

3層　にぶい黄褐色細砂層。ローム土主体。

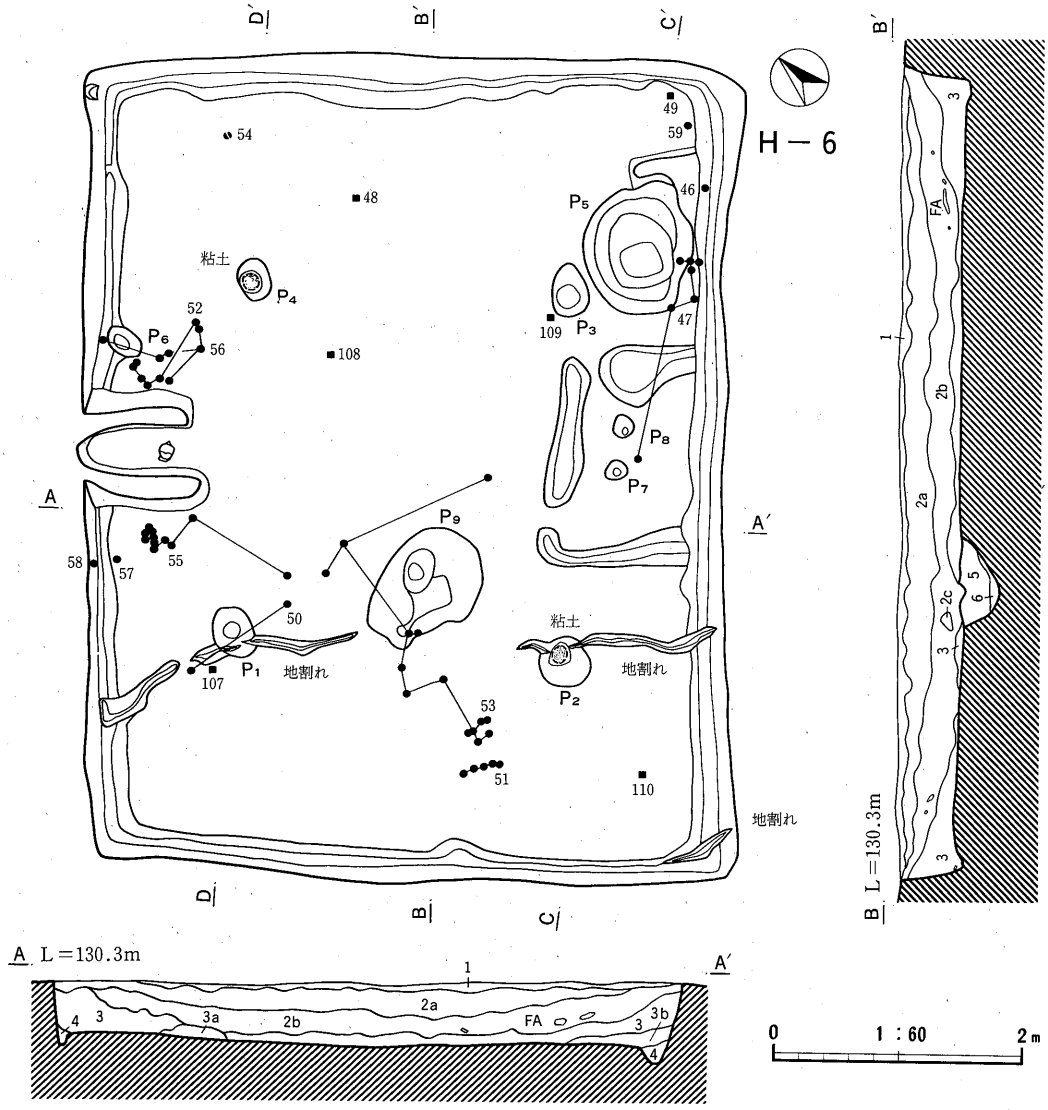
3a層　3層に炉址のため焼土粒子が入る。

3b層　3層に比べ黒色土がやや多い。

H－4　柱穴一覧

No.	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	31	28	71	
P_2	円　形	21	20	78	
P_3	円　形	21	18	72	
P_4	円　形	25	21	80	
P_5	円　形	52	48	67	
P_6	円　形	30	25	22	

Fig.12　H－4号住居址



H－6号住居址層序説明

1層　黒色細砂層。As-Bを40%含む。
2a層　黒褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを15%含む。
2b層　褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを15%含む。
　　Hr-FAがブロック状に入る。
3層　黄褐色細砂層。ローム粒子を25%含む。
3a層　橙色微砂層。ローム、焼土。
3b層　黄褐色微砂層。
4層　明黄褐色微砂層。
5層　明黄褐色微砂層。ローム土を60%含む。
6層　黄褐色微砂層。

H－5　柱穴一覧

No.	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	38	36	30	貯蔵穴

H－6　柱穴一覧

No.	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	40	33	91	
P_2	円　形	41	40	73	底に粘土
P_3	円　形	42	30	74	
P_4	円　形	33	24	75	底に粘土
P_5	円　形	106	71	79	
P_6	円　形	27	23	15	
P_7	円　形	19	16	23	
P_8	円　形	19	16	30	
P_9	円　形	100	75	39	床下土坑

Fig. 13　H－6号住居址

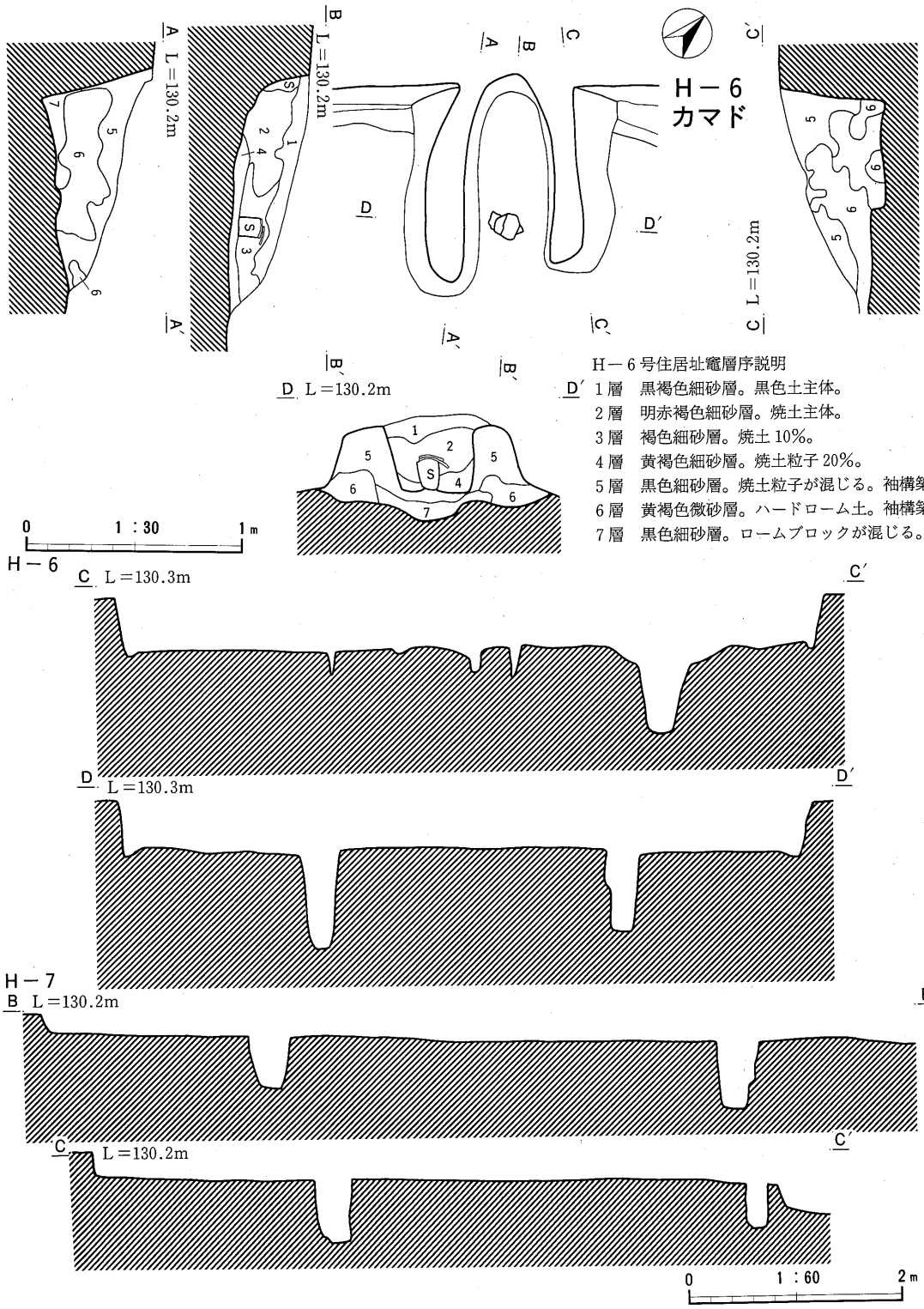
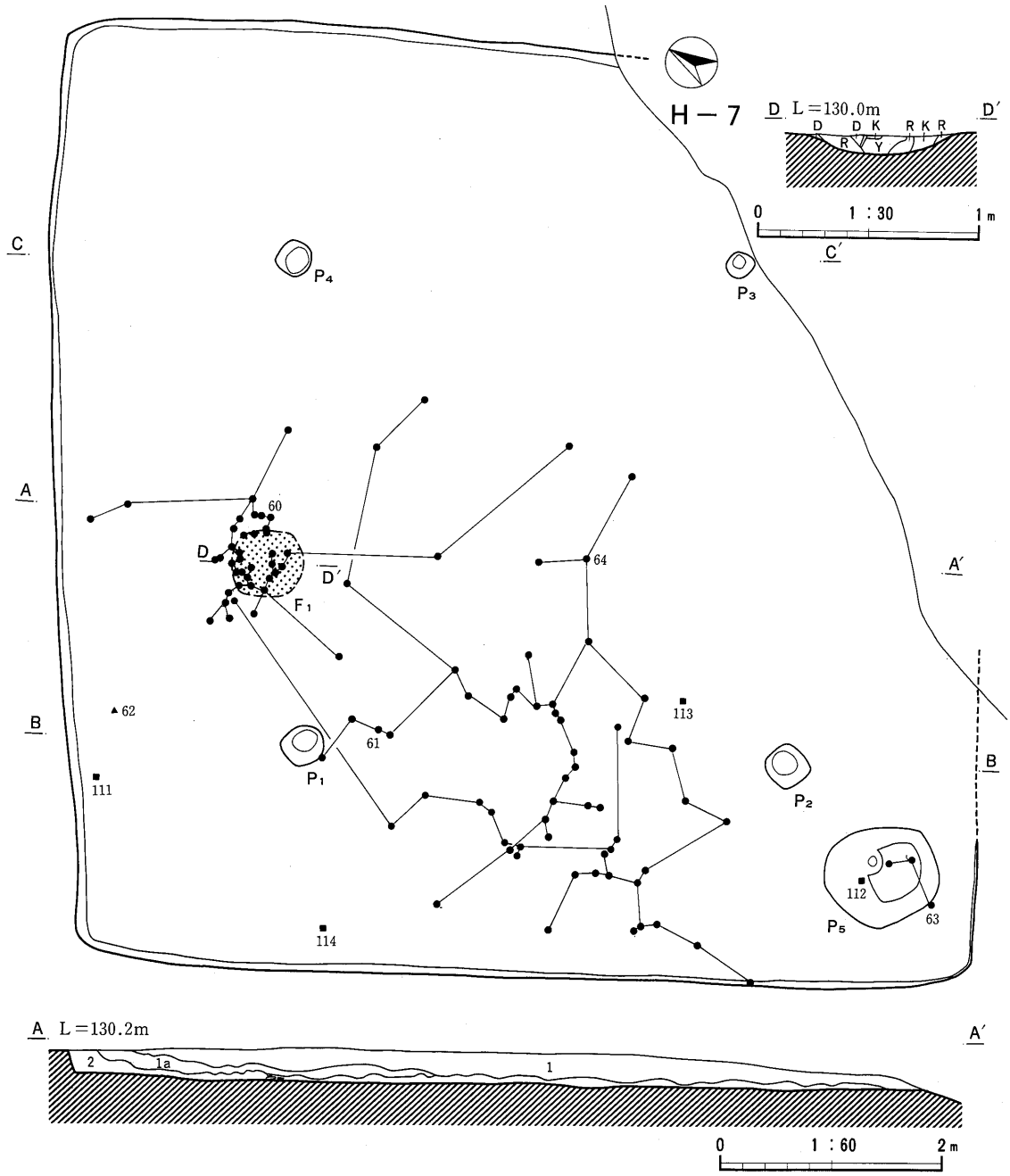


Fig. 14　H－6・7 号住居址



H－7号住居址層序説明

1層　黒褐色細砂層。

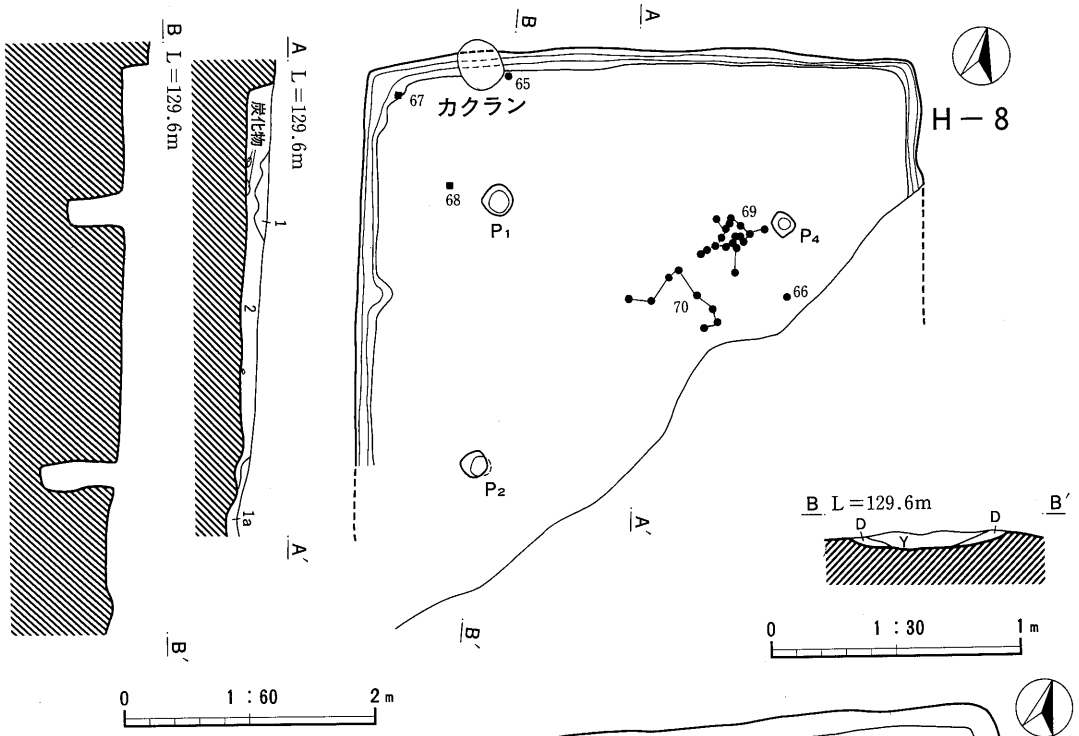
1a層　褐色細砂層。炭化材を含む。

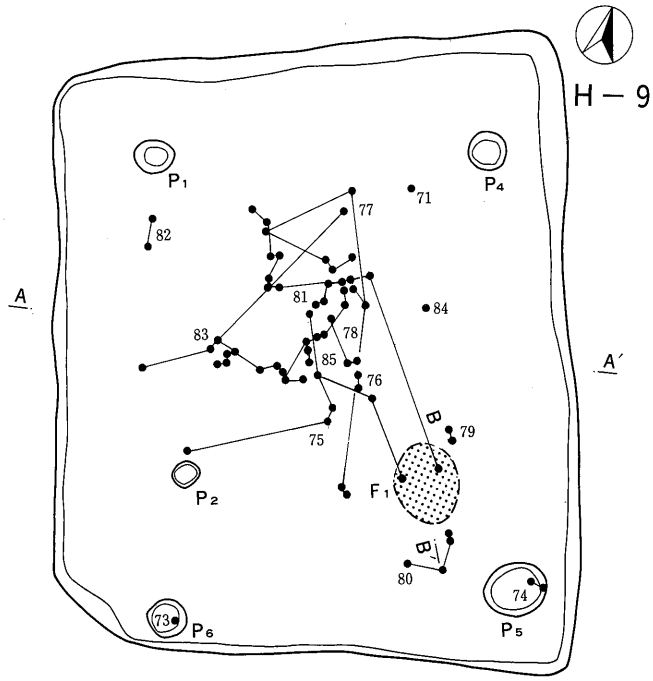
2層　黄褐色細砂層。

H－7　柱穴一覧

No.	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	36	36	47	
P_2	円　形	37	33	60	
P_3	円　形	25	23	40	
P_4	円　形	31	30	57	
P_5	円　形	103	88	51	貯蔵穴

Fig. 15　H－7号住居址





H－8　柱穴一覧

No.	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	25	24	43	
P_2	円　形	22	21	64	
P_4	円　形	20	19	49	

H－9　柱穴一覧

No.	形　状	長径	短径	深さ	備　考
P_1	円　形	32	26	23	
P_2	円　形	22	19	23	
P_4	円　形	32	30	25	
P_5	円　形	51	43	22	
P_6	円　形	31	30	23	

H－8号住居址層序説明
1層　黒褐色微砂層。
1a層　暗褐色細砂層。
2層　黄褐色微砂層。炭化物を含む。

H－9号住居址層序説明
1層　黒褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを10％含む。
2層　黒色細砂層。黒色土主体
3層　にぶい黄褐色微砂層。ローム土主体。
3a層　黄褐色微砂層。

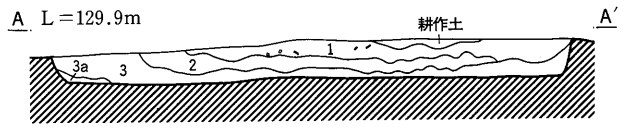
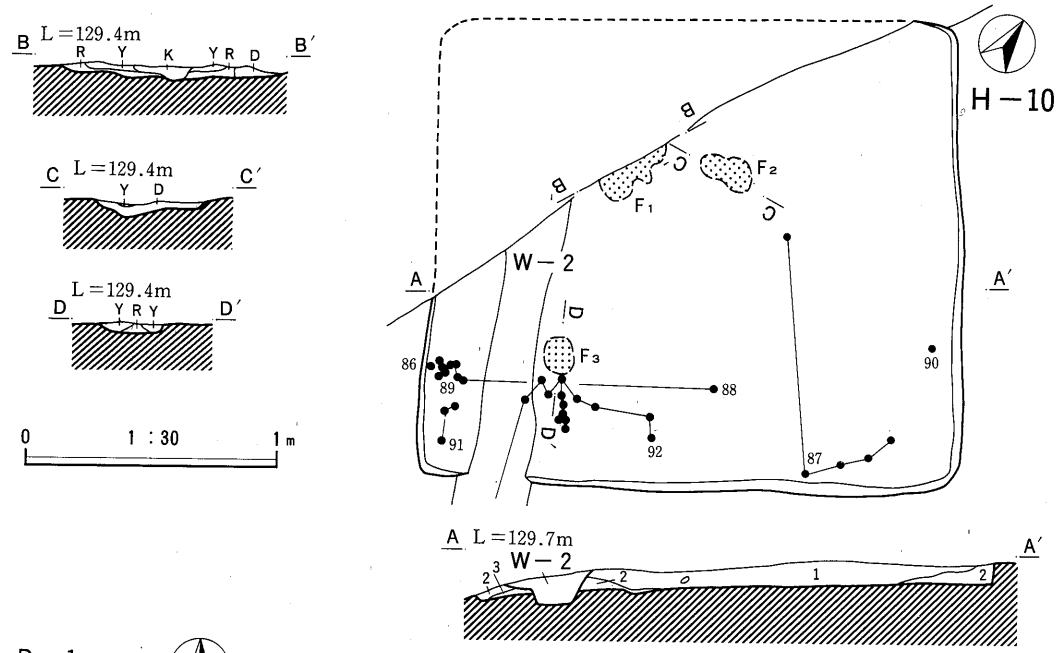
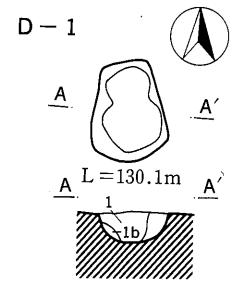
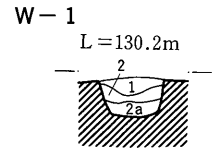
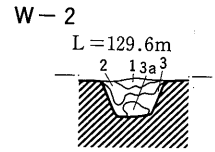


Fig.16　H－8・9号住居址









0 1：60 2m

H－10号住居址層序説明

1層　暗褐色微砂層。Hr-FP、As-Cを40％含む。
2層　黒褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを10％含む。
3層　黄褐色微砂層。ローム土主体。

D－1号土坑層序説明

1層　暗褐色細砂層。黒色土主体
1a層　褐色細砂層。黒色もローム土の混じり。
1b層　褐色細砂層。ロームブロックを10％含む。

W－1号溝層序説明

1層　黒褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを30％含む。
2層　暗褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。
2a層　褐色細砂層。ロームブロックを10％含む。

W－2号溝層序説明

1層　暗褐色細砂層。ローム主体。
2層　黒褐色細砂層。黒色土主体。
3層　褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。
3a層　黄褐色細砂層。ロームブロック含む、黒色土とローム土の混じり。

Fig. 17　H－10号住居址、W－1・2号溝、D－1号土坑

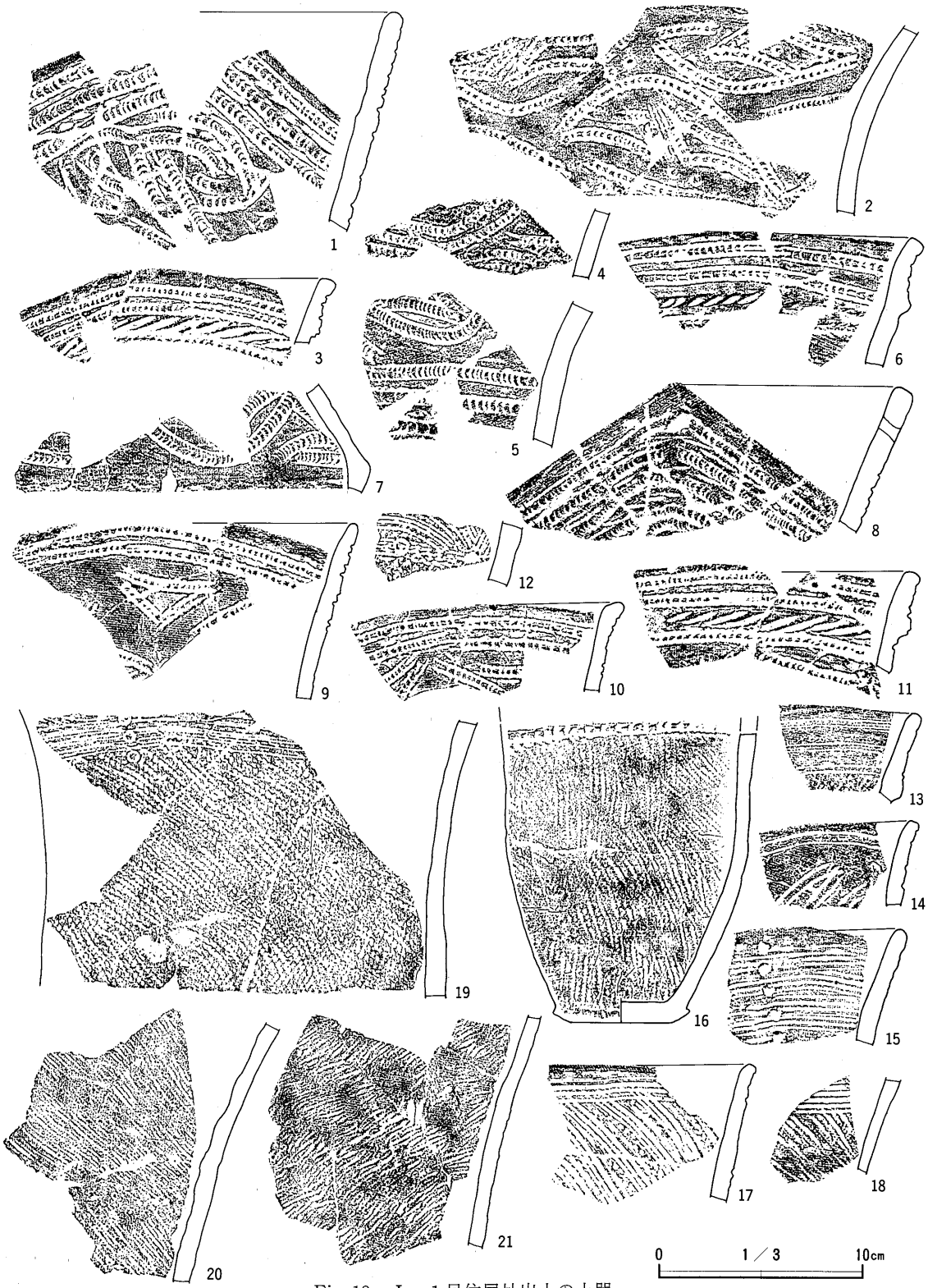
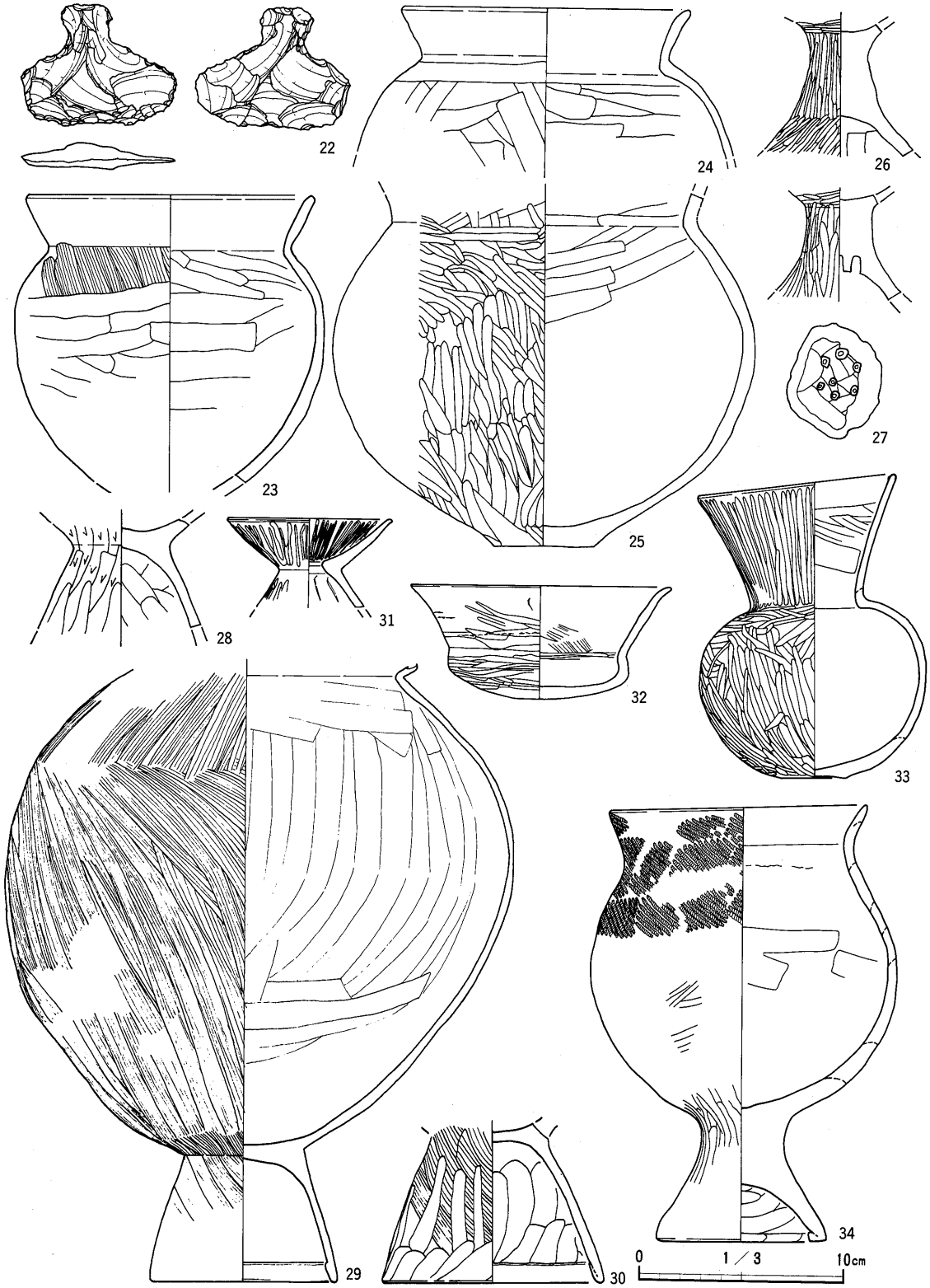
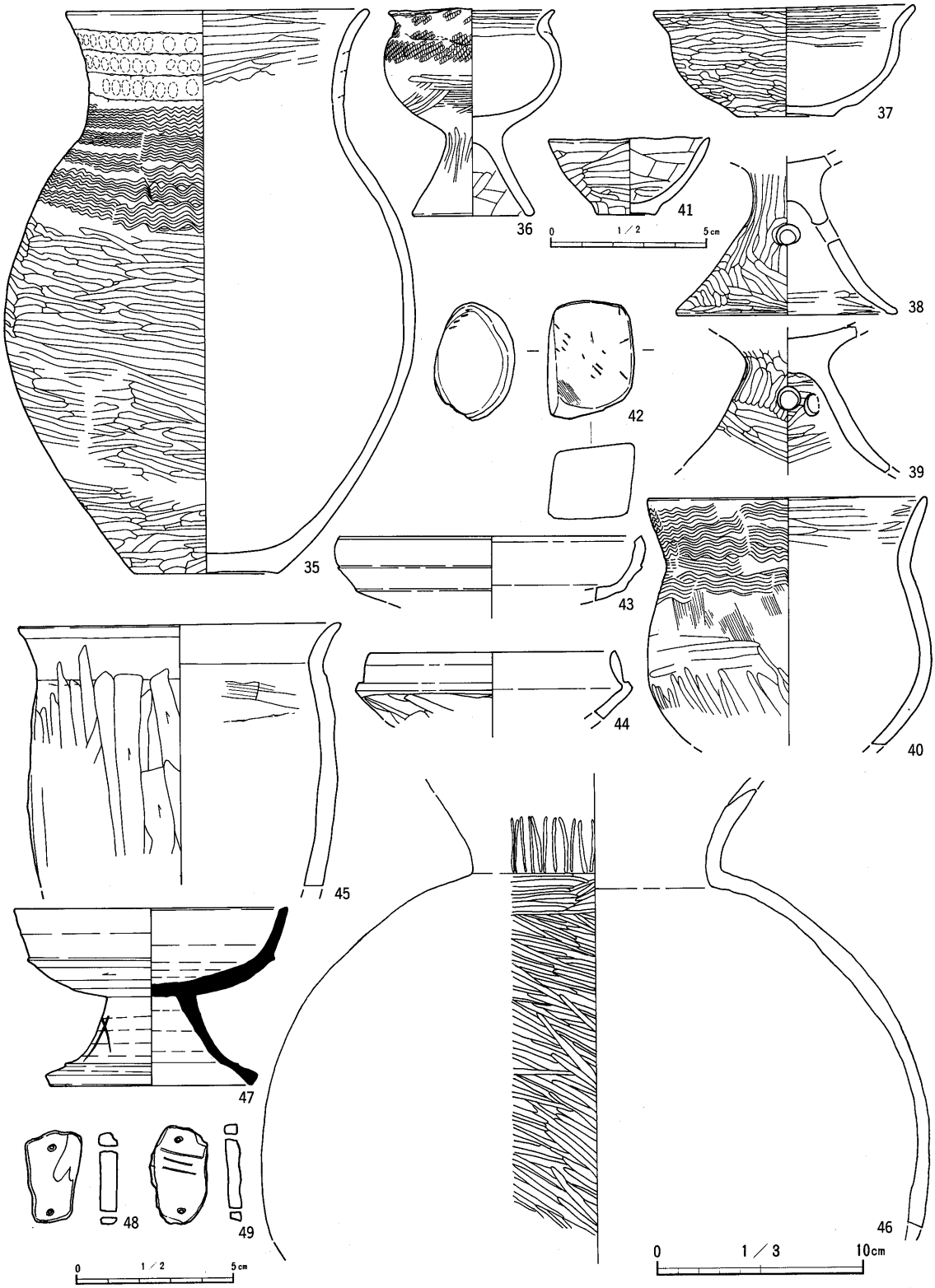


Fig. 18　J－1号住居址出土の土器



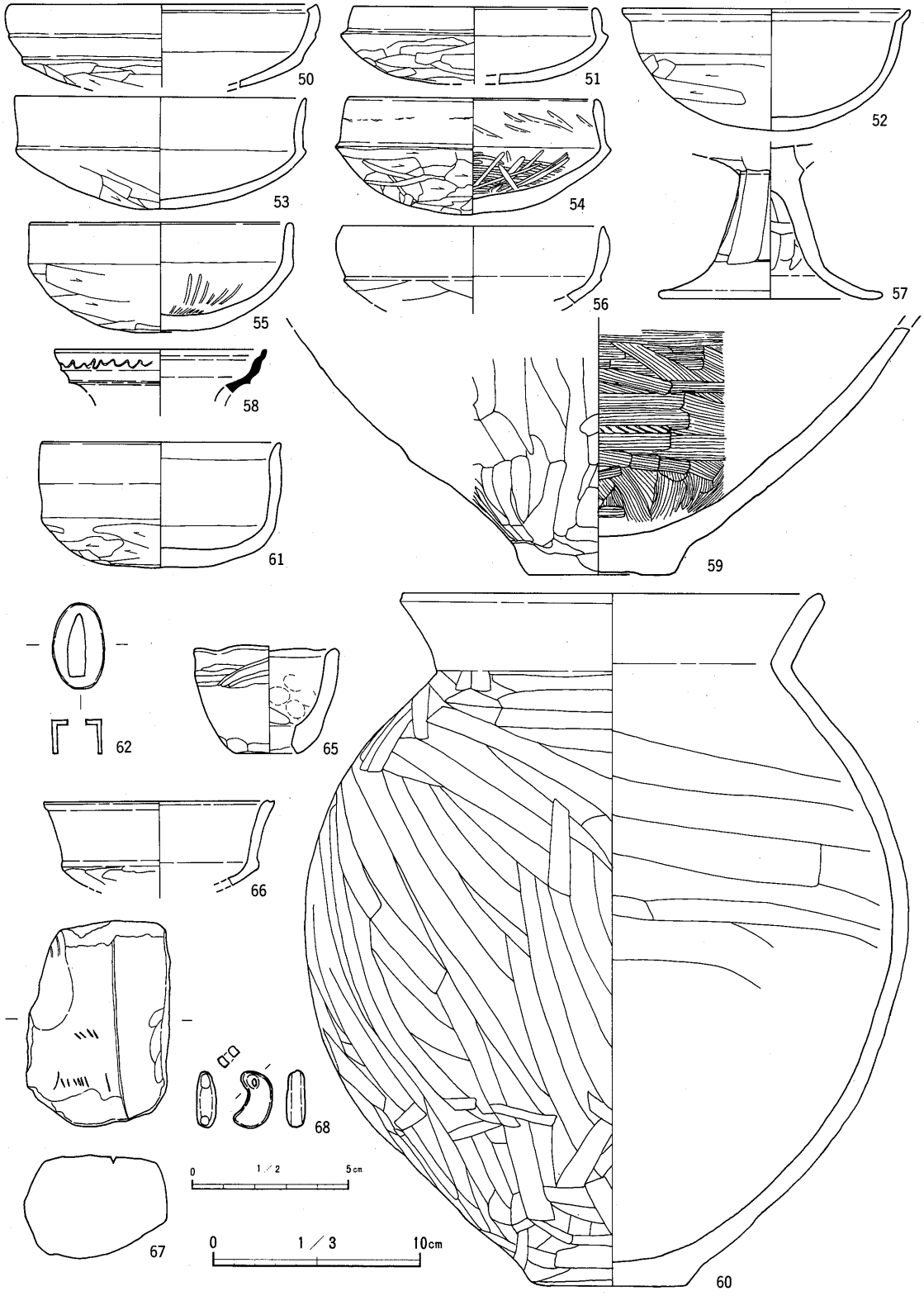
J－1…22、H－1…23～30、H－2…31～33、H－3…34

Fig. 19　J－1・H－1～3号住居址出土の土器



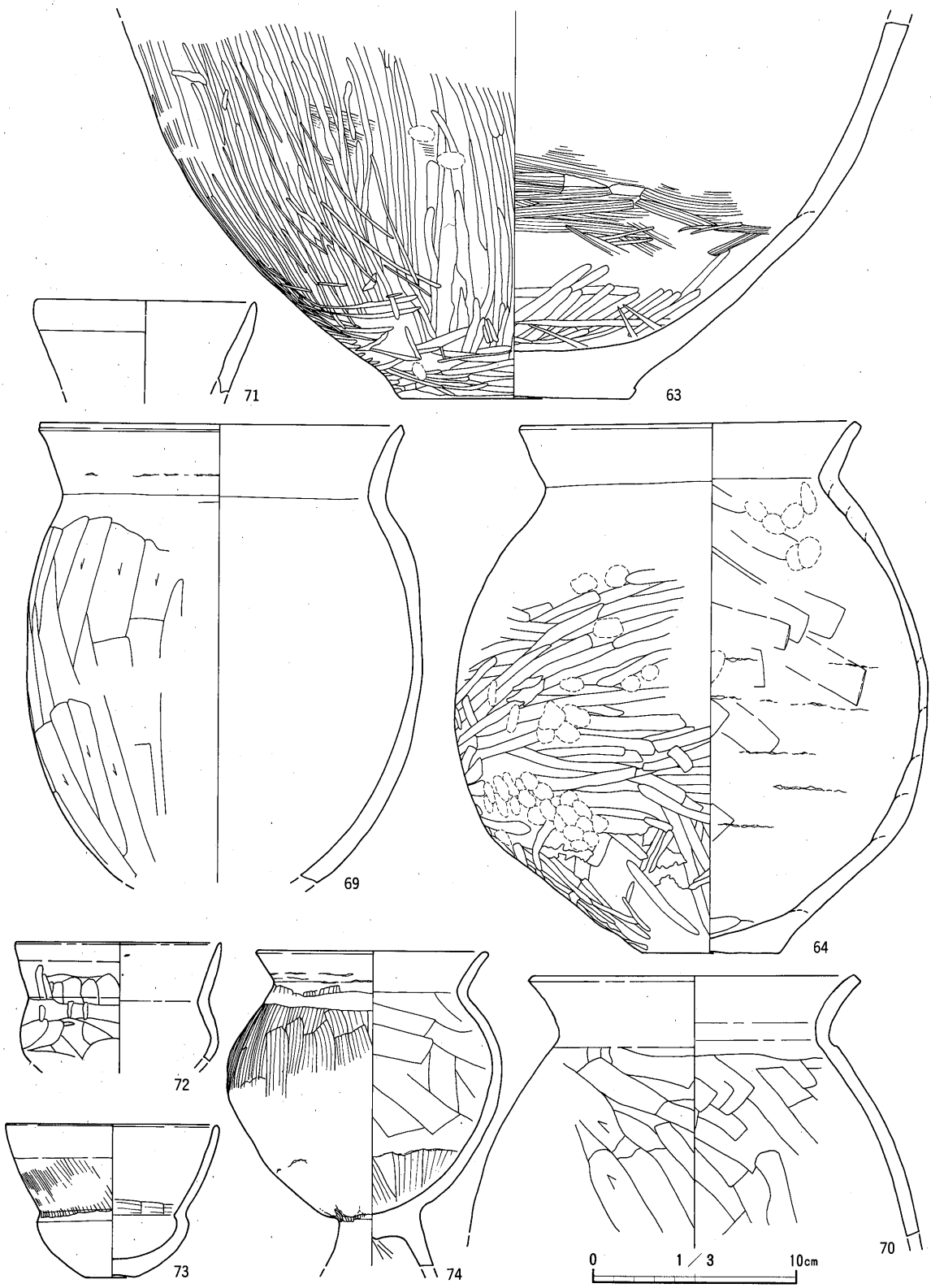
H－4…35～41、H－5…42～45、H－6…46～49

Fig. 20　H－4～6号住居址出土の土器



H－6…50～59、H－7…60～62、H－8…65～68

Fig. 21　H－6～8号住居址出土の土器



H－7…63、64、H－8…69、70、H－9…71～74

Fig. 22　H－7～9号住居址出土の土器

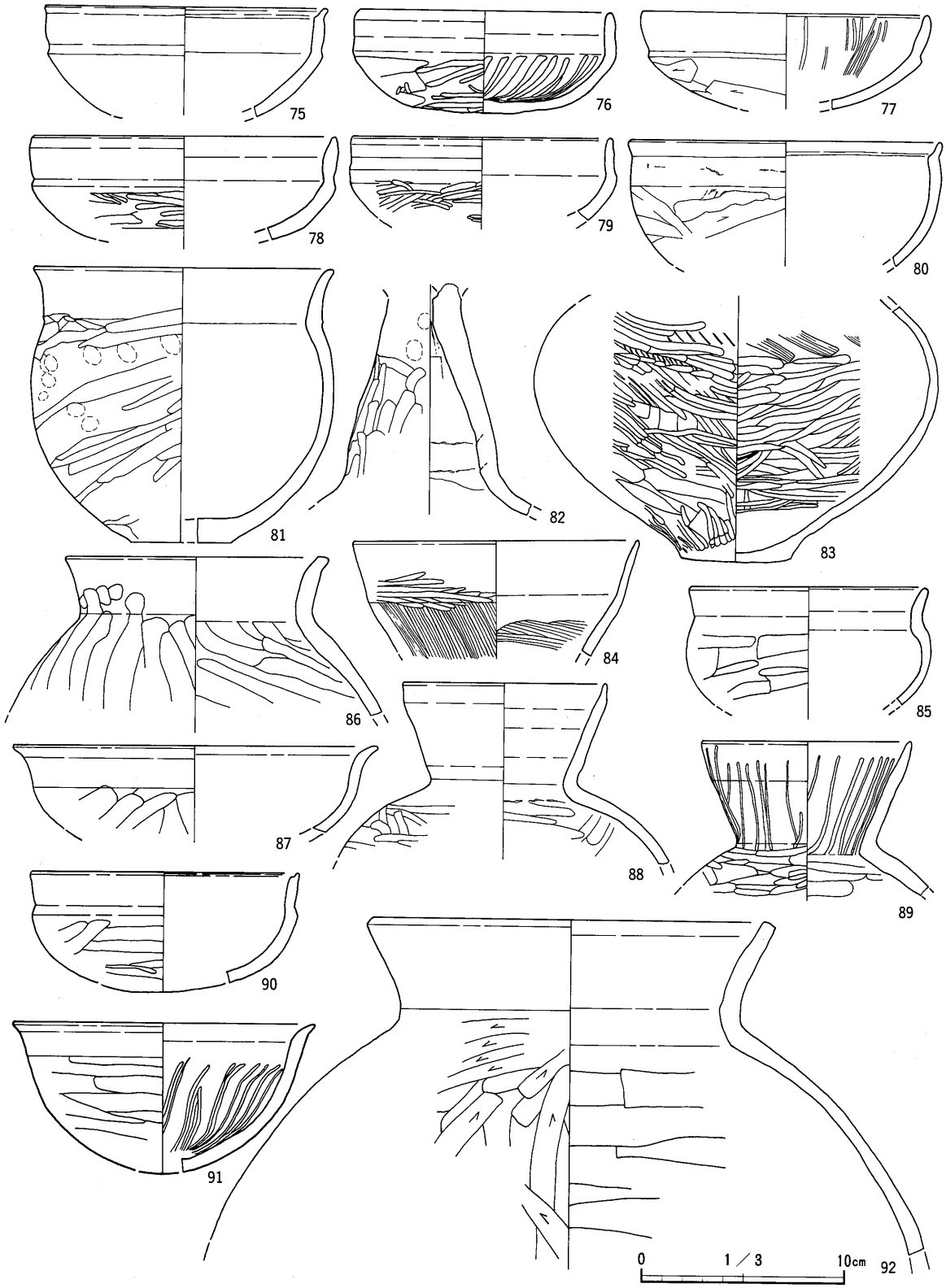
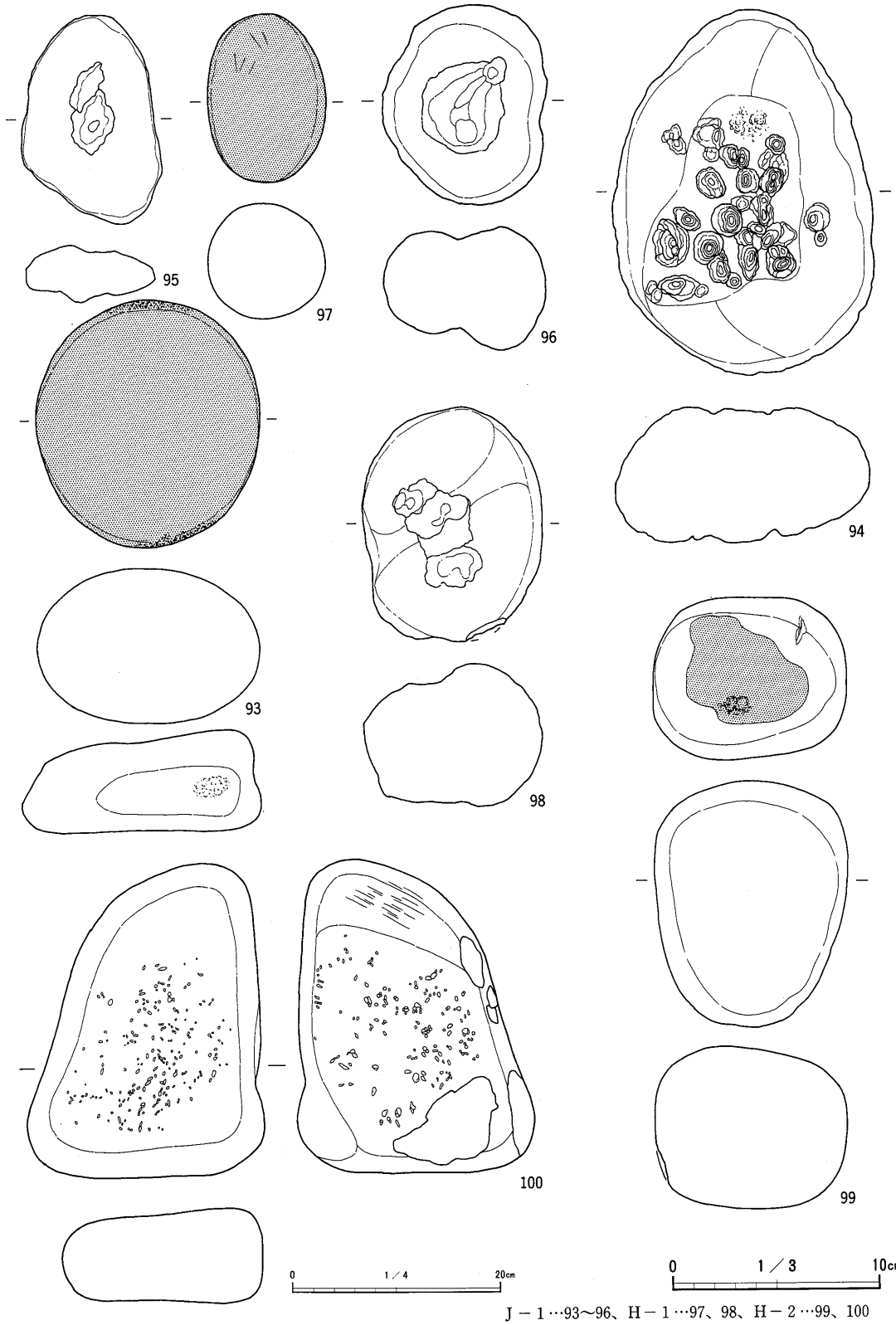


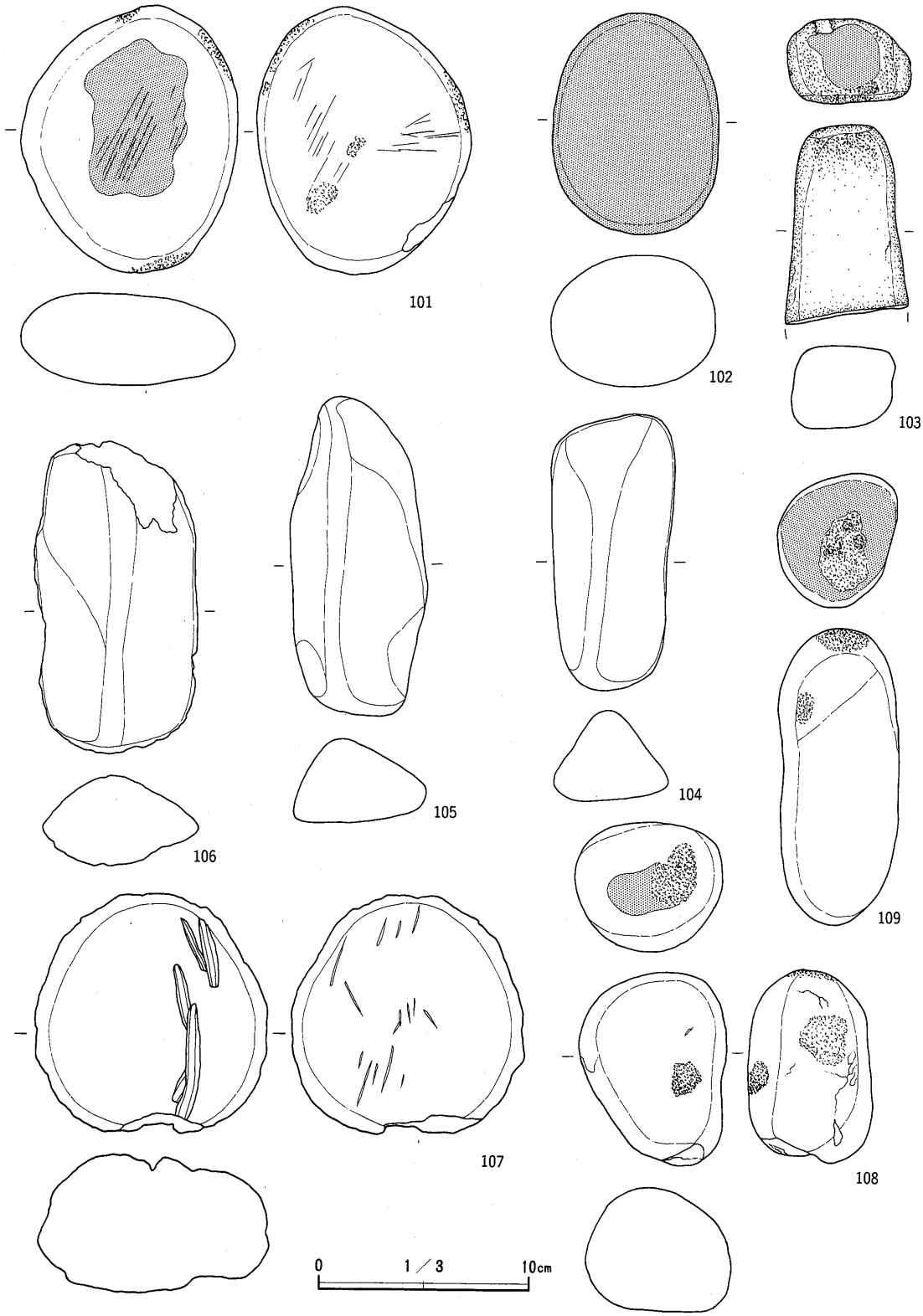
Fig. 23　H－9・10号住居址出土の土器

H－9…75～85、H－10…86～92



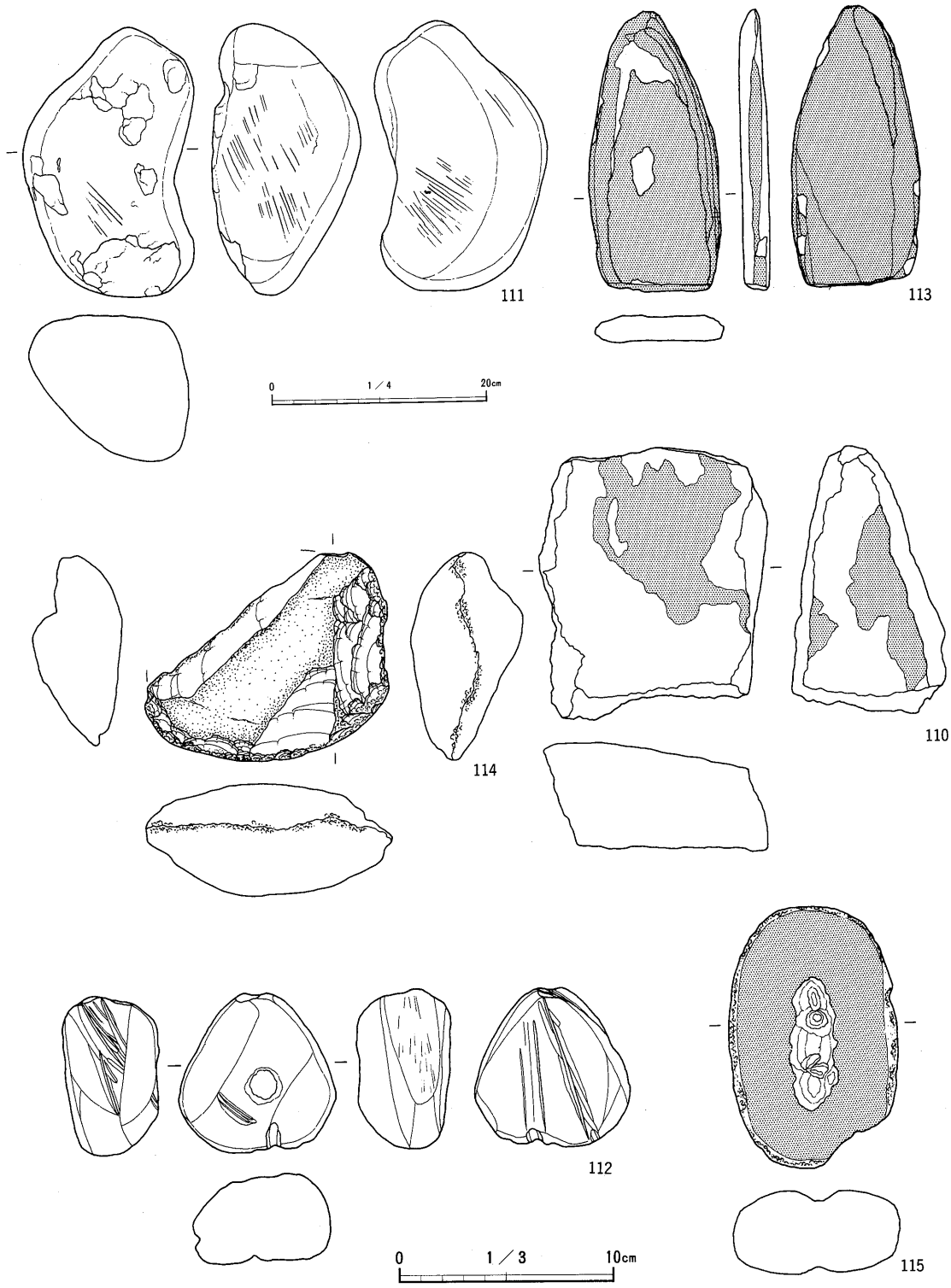
J－1…93～96、H－1…97、98、H－2…99、100

Fig. 24　J－1・H－1・2号住居址出土の石器



H－2…101、H－4…102、103、H－5…104～106、H－6…107～109

Fig. 25　H－2・4～6号住居址出土の石器



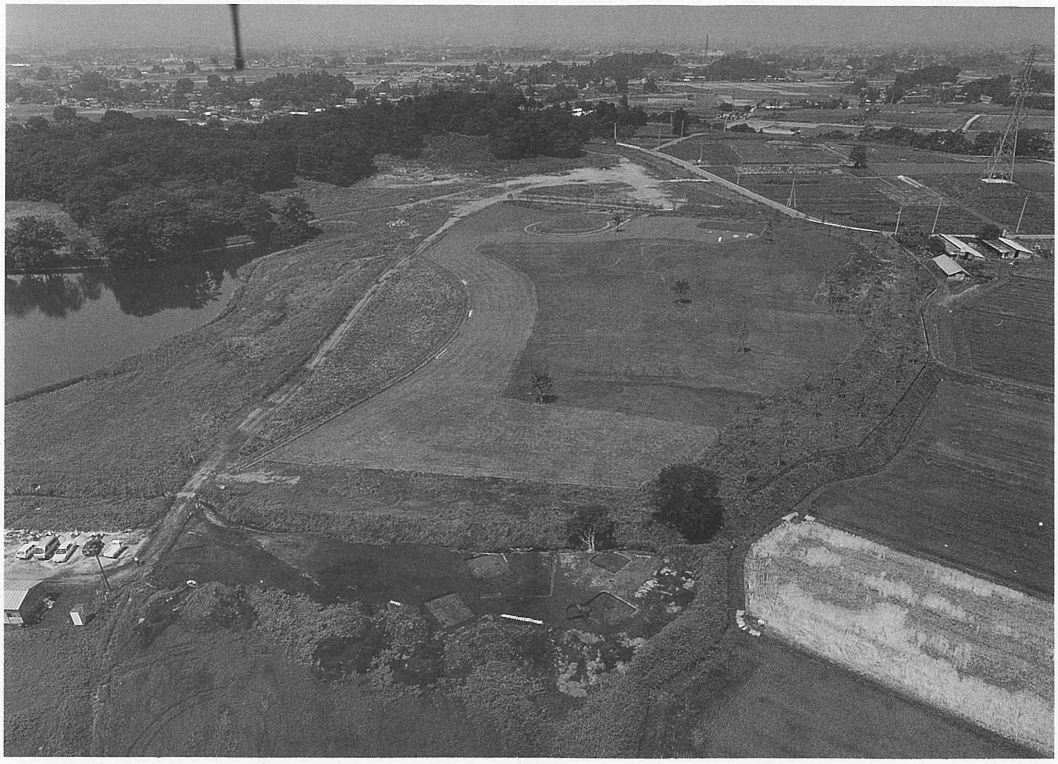
H－6…110、H－7…111～114、表採…115

Fig. 26　H－6・7号住居址出土の石器・石製品

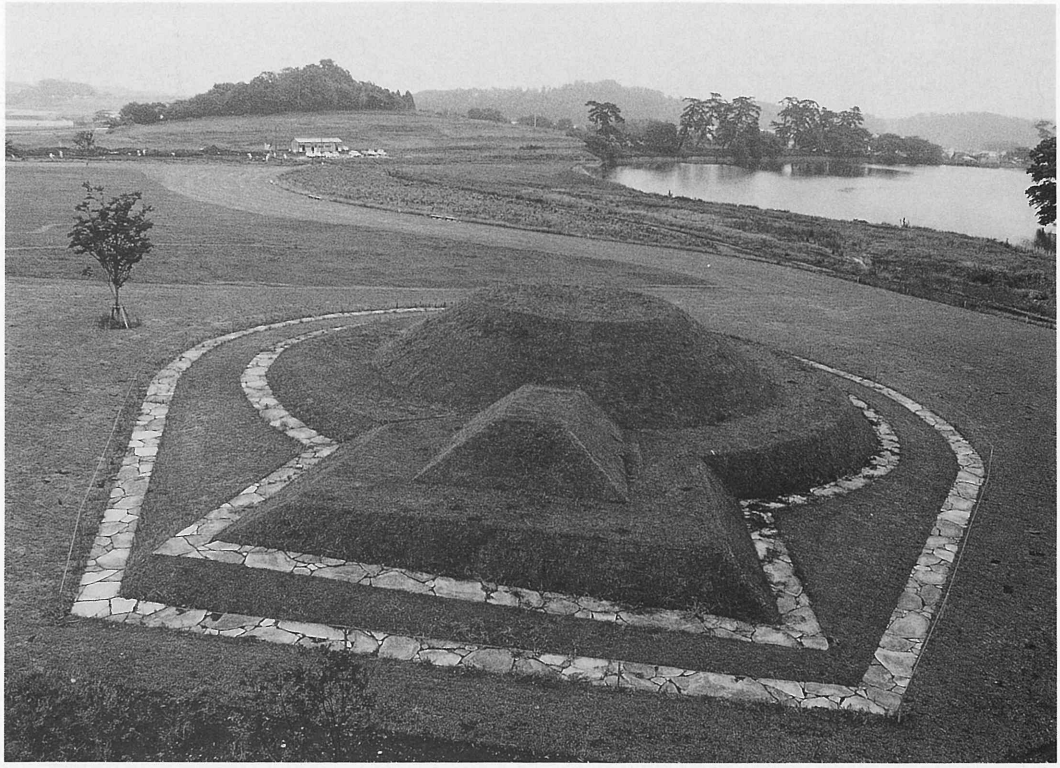
平成６年度調査区全景（北から）

PL. 2

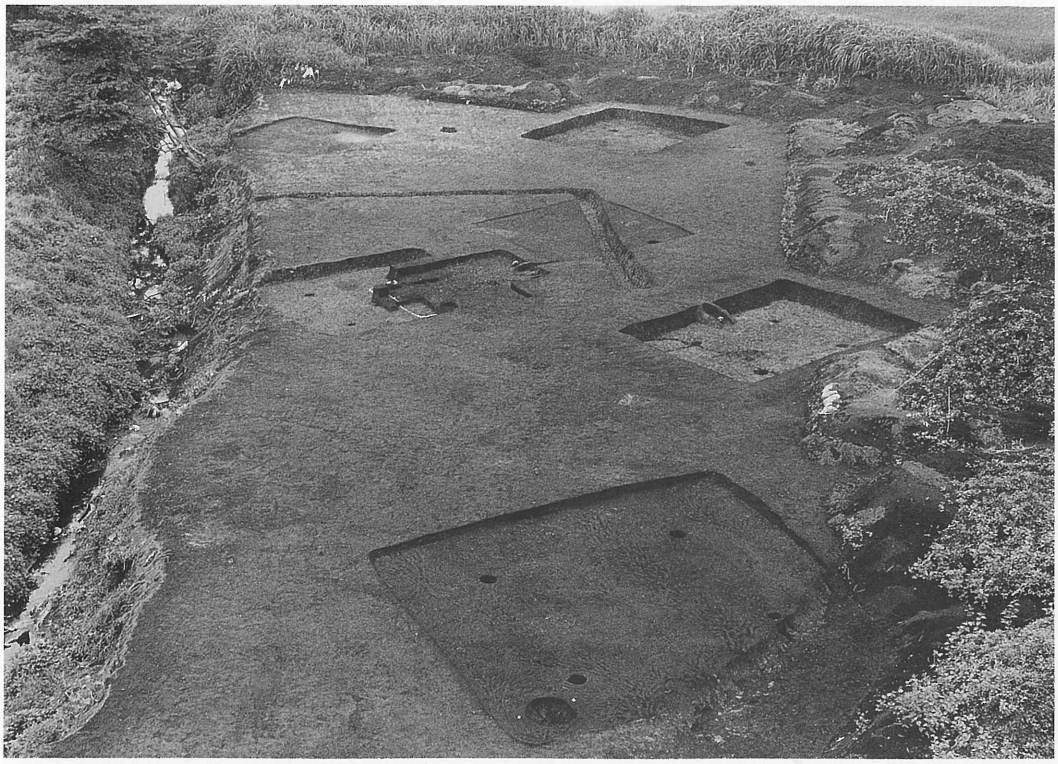
遺跡全景（真上から）



1．平成６年度調査区と風のわたる丘（東から空撮）

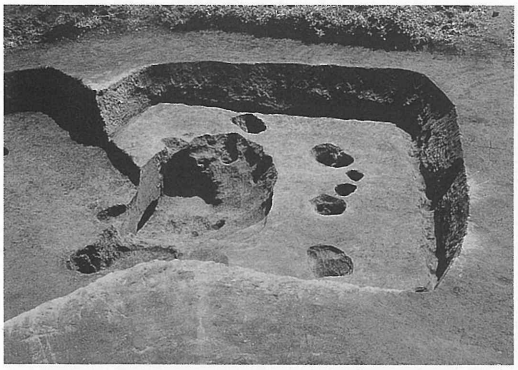


2．復原された内堀M－１号墳（北西から）

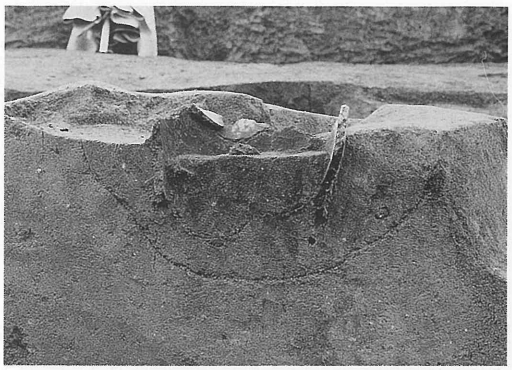


1．調査区北側（南から）

2．Ｊ－１号住居址（東から）

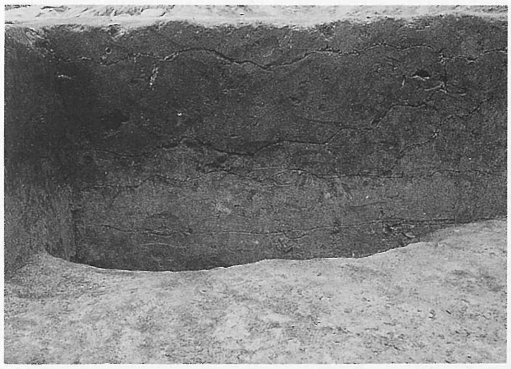


1．Ｊ－１号住居址（南から）

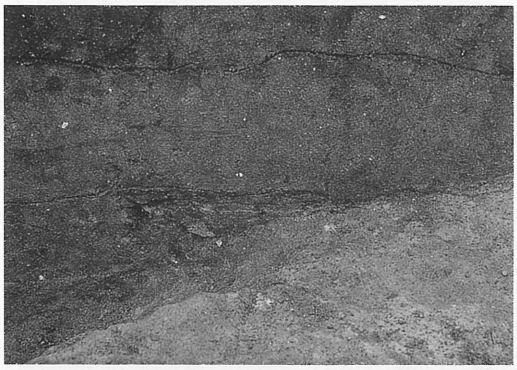


2．Ｊ－１号住居址埋設土器セクション（西から）

3．Ｊ－１号住居址貯蔵穴（東から）

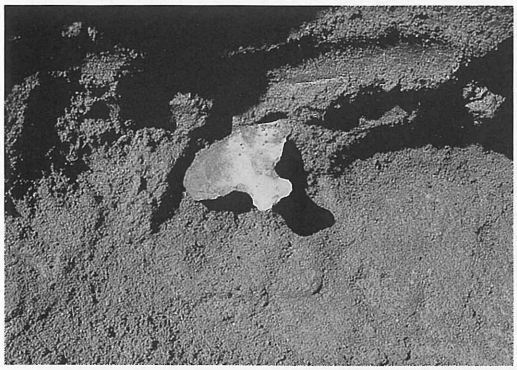


4．Ｊ－１号住居址貼り床セクション（南東から）

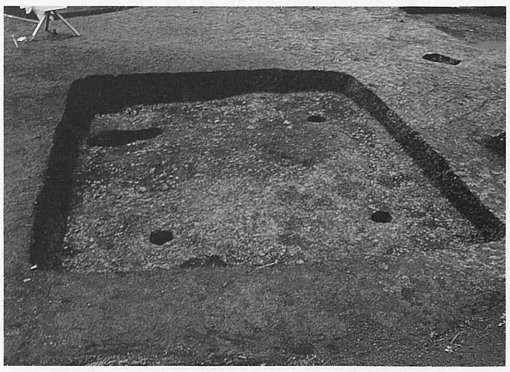


5．Ｊ－１号住居址貼り床セクション（南から）

6．Ｊ－１号住居址遺物出土状態（南から）

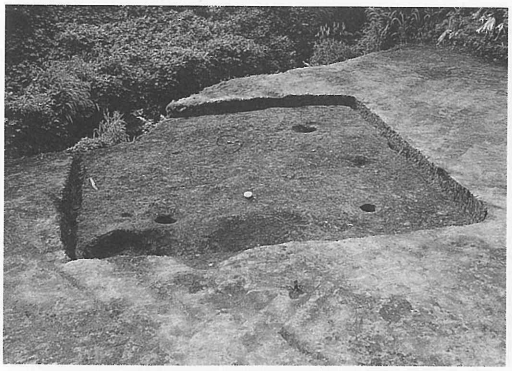


7．Ｊ－１号住居址遺物出土状態（北から）



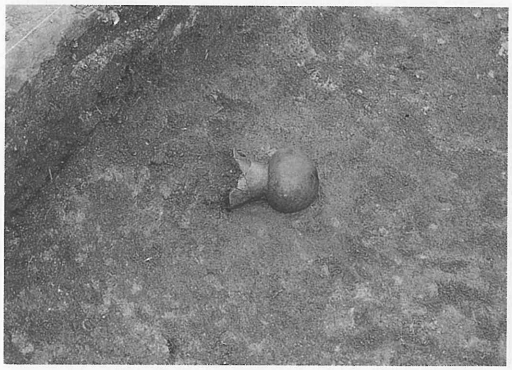
8．Ｈ－１号住居址（北から）

1．H－1号住居址遺物出土状態（北東から）

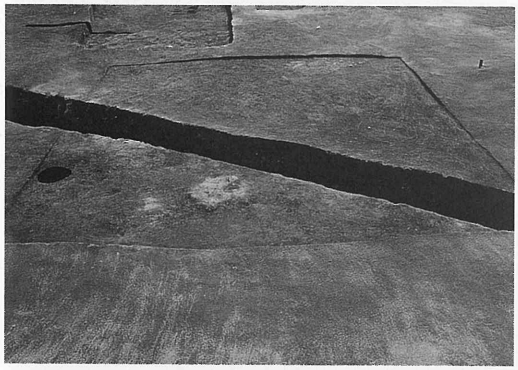


2．H－2号住居址（南東から）

3．H－2号住居址遺物出土状態（南西から）



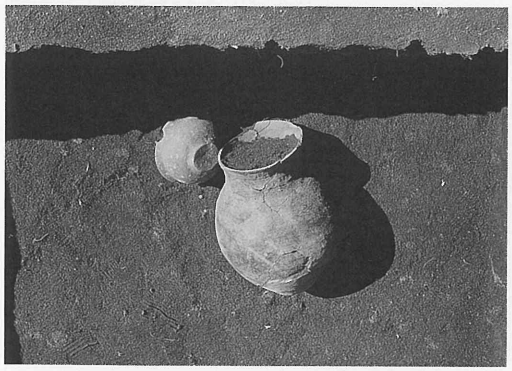
4．H－2号住居址遺物出土状態（南東から）



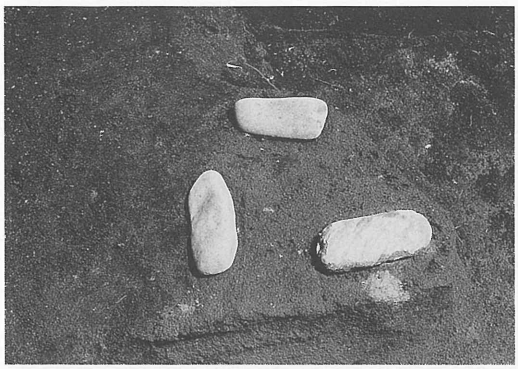
5．H－3号住居址（東から）

6．H－3号住居址とW－1号溝（北から）

7．H－4・5号住居址（東から）



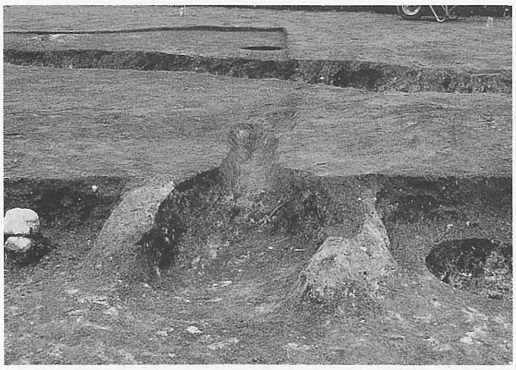
8．H－4号住居址遺物出土状態（北から）



1．H－4号住居址編物石出土状態（北から）

2．H－5号住居址（西から）

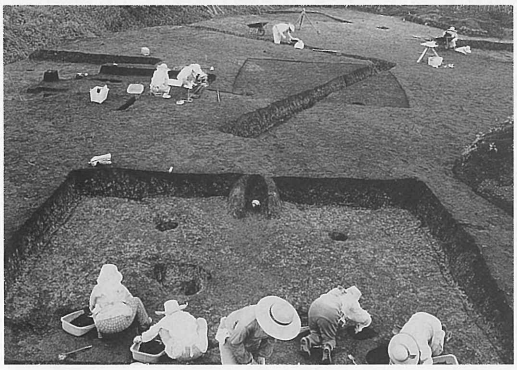
3．H－4・5号住居址発掘調査風景（南から）



4．H－5号住居址の竈（南西から）

5．H－5号住居址砥石出土状態（南から）

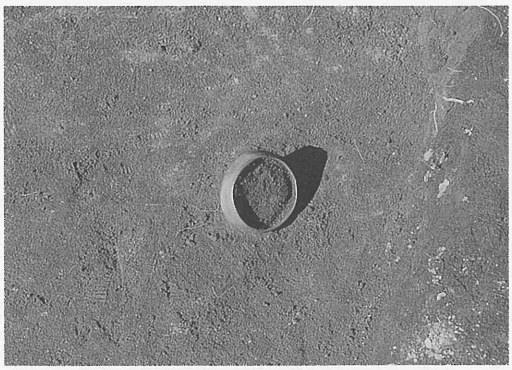
1．H－6号住居址（南東から）



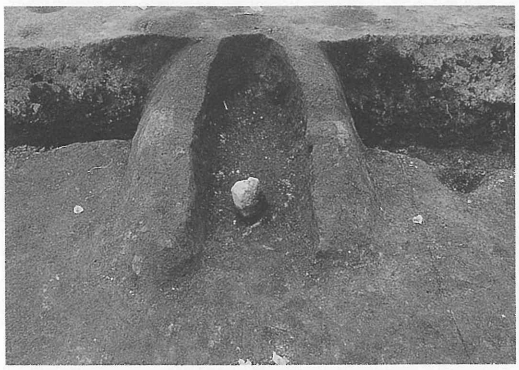
2．H－6号住居址発掘調査風景（南東から）

3．H－6号住居址の竈（南東から）

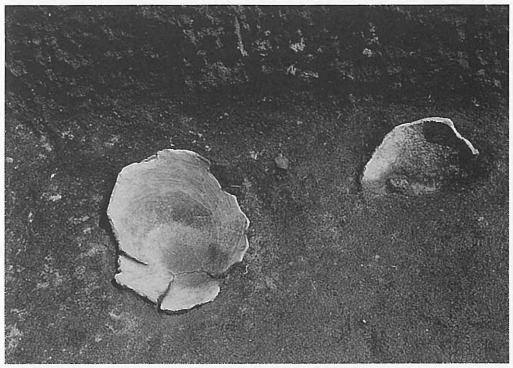
4．H－6号住居址遺物出土状態（北西から）



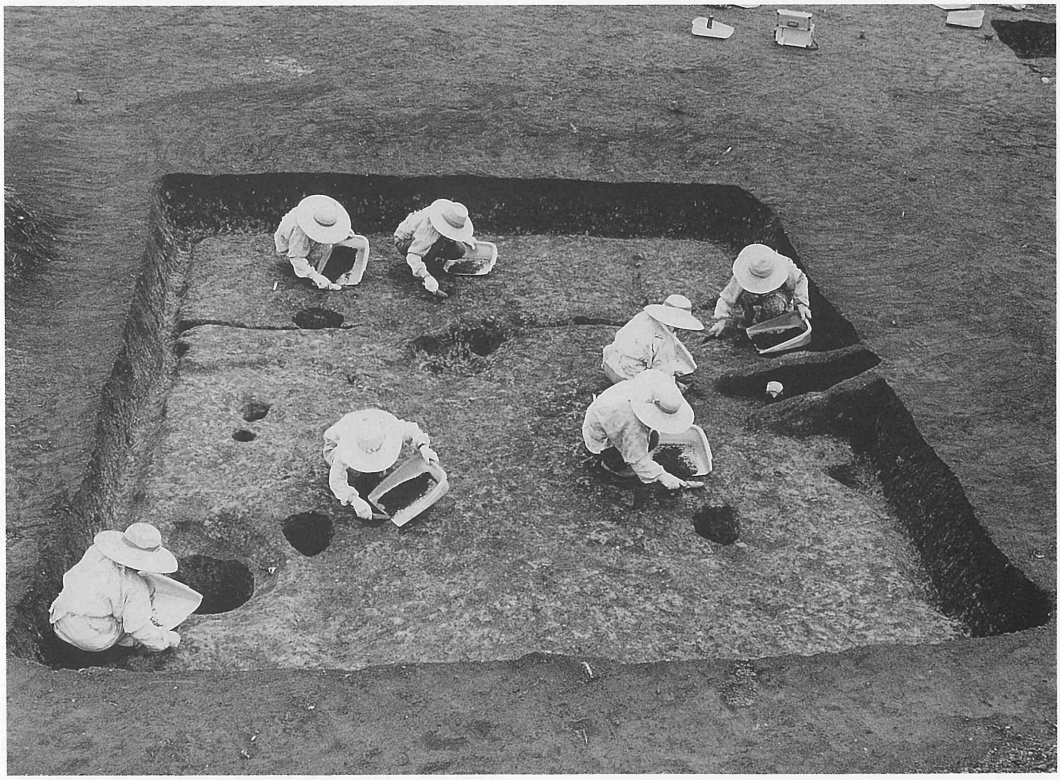
5．H－6号住居址遺物出土状態（西から）



1．H－6号住居址の竈（南東から）



2．H－6号住居址遺物出土状態（北から）

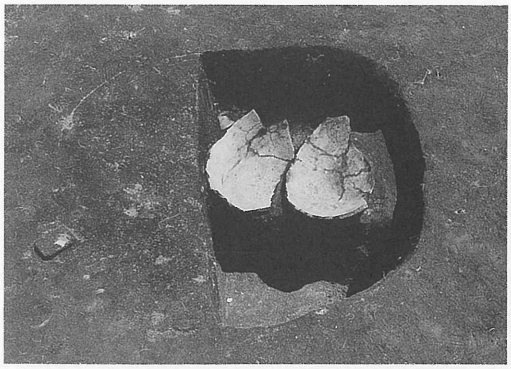


3．H－6号住居址発掘調査風景（東から）

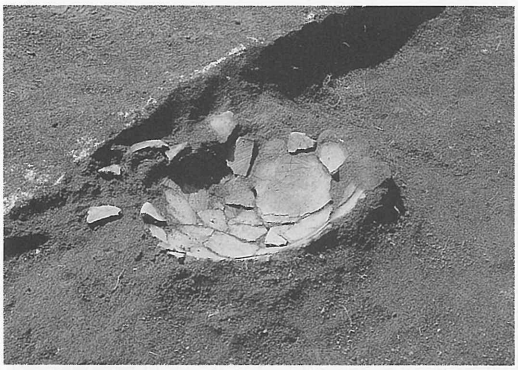
4．H－6号住居址遺物出土状態（北から）

5．H－7号住居址（南から）

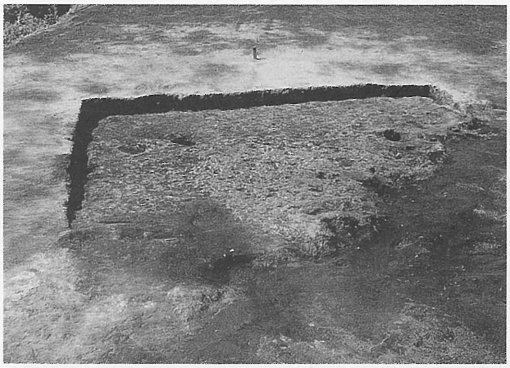
1．H－7号住居址遺物出土状態（西から）



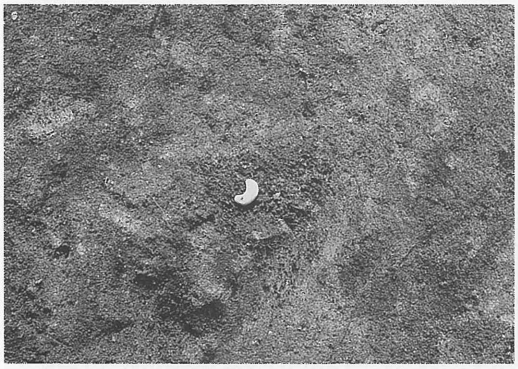
2．H－7号住居址遺物出土状態（西から）



3．H－7号住居址遺物出土状態（南西から）



4．H－8号住居址（南から）



5．H－8号住居址遺物出土状態（東から）

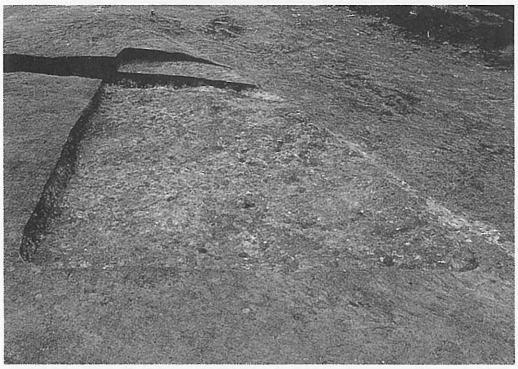
6．H－8号住居址遺物出土状態（北から）

7．H－8号住居址遺物出土状態（西から）

8．H－9号住居址（北から）

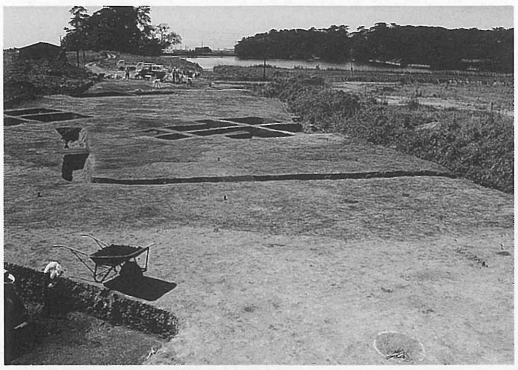
1．H－9号住居址遺物出土状態（北から）

2．H－9号住居址遺物出土状態（東から）

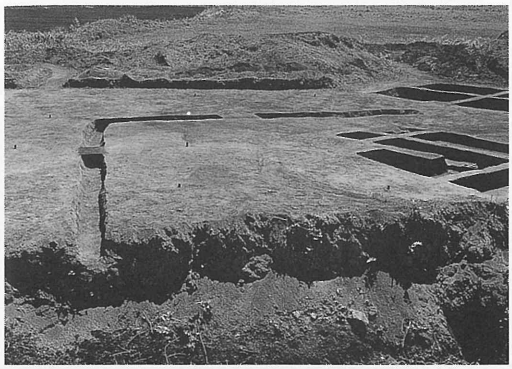


3．H－10号住居址（北東から）

4．H－10号住居址遺物出土状態（北から）



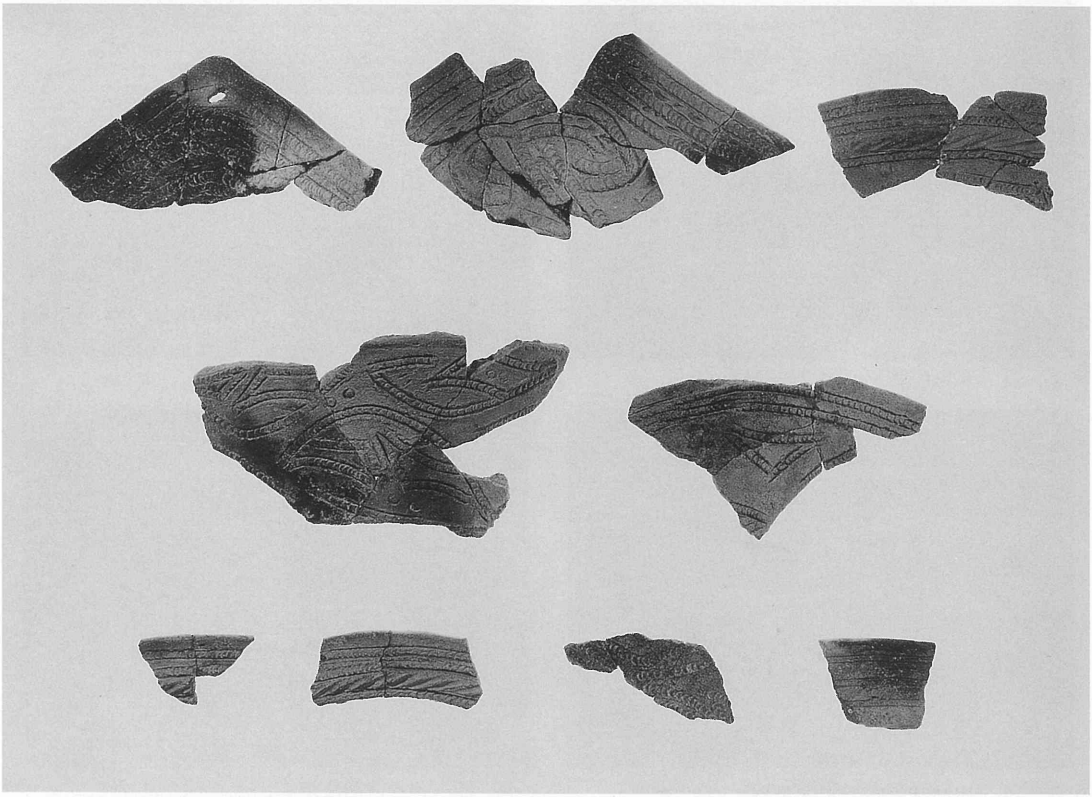
5．W－1号溝（北から）



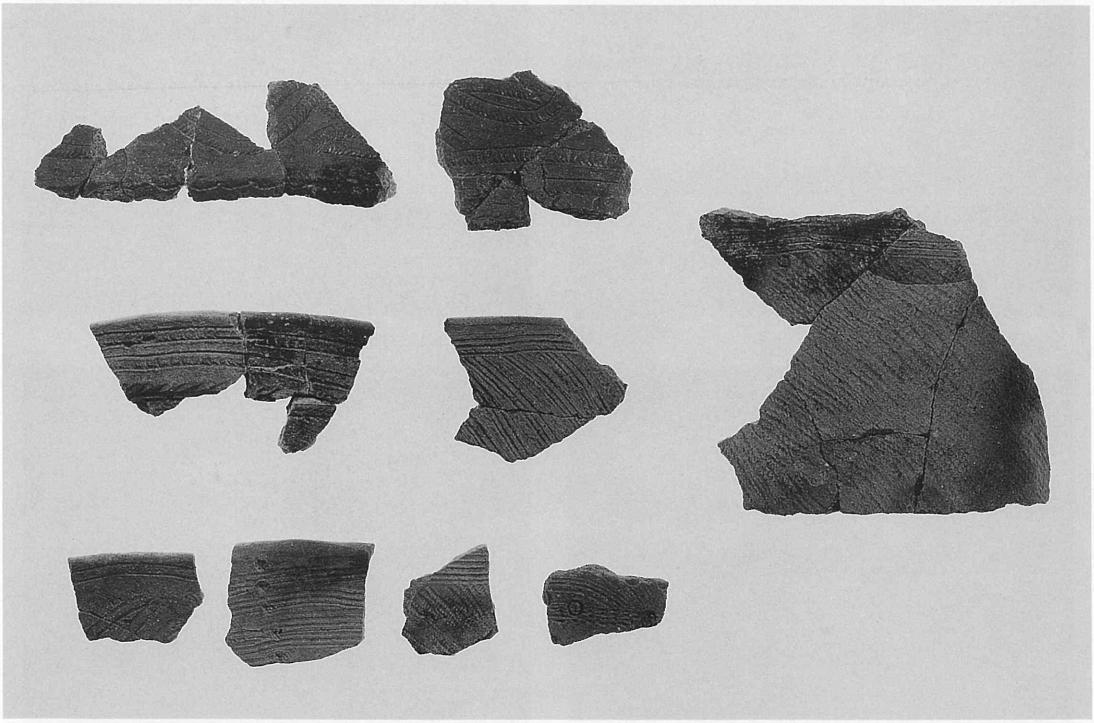
6．W－1号溝（西から）

7．W－2号溝（南東から）

8．D－1号土坑（南から）

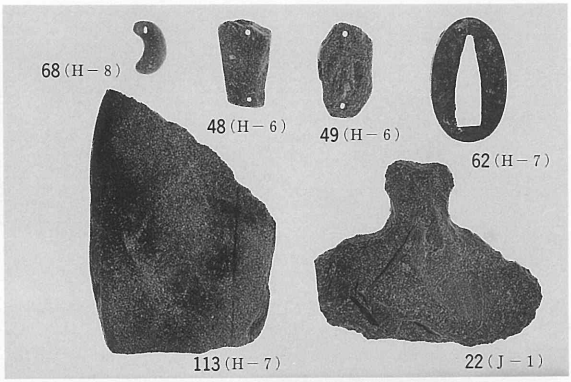


1．縄文土器



2．縄文土器

16 (J－1)



32 (H－2)

31 (H－2)

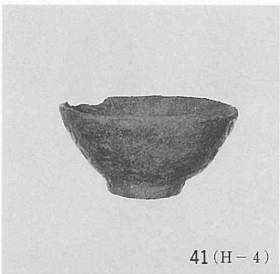
40 (H－4)

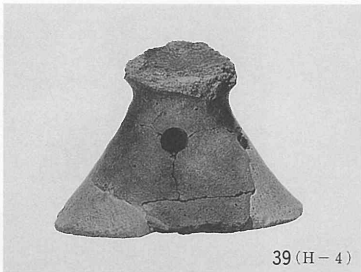
33 (H－2)

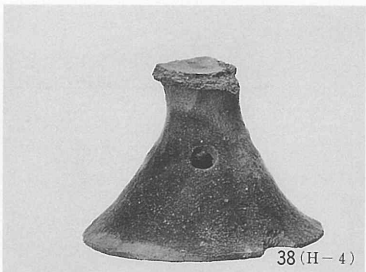
34 (H－3)

29 (H－1)

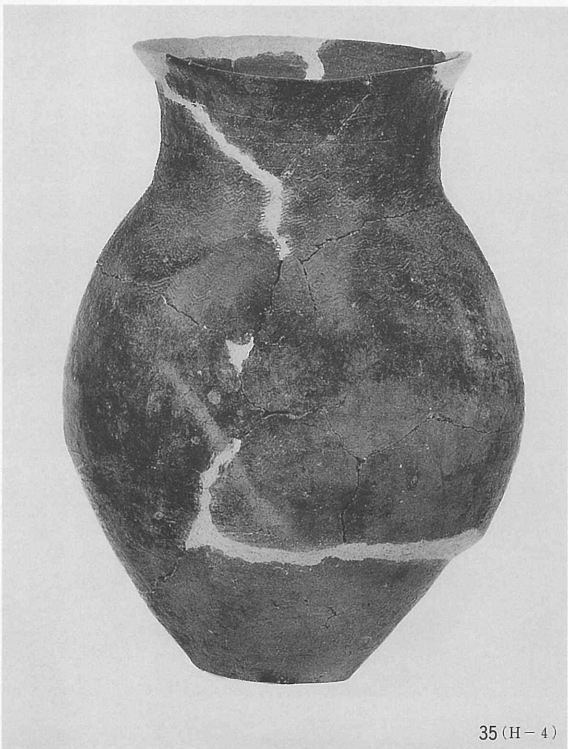
PL. 14


41 (H－4)

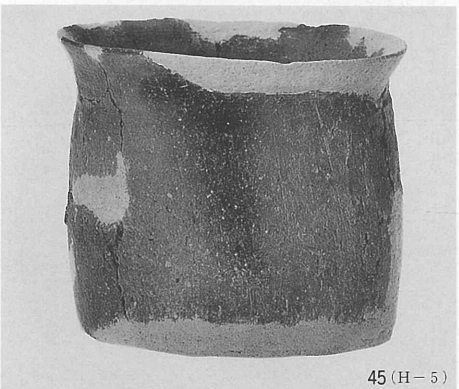

39 (H－4)


38 (H－4)

36 (H－4)


35 (H－4)

37 (H－4)

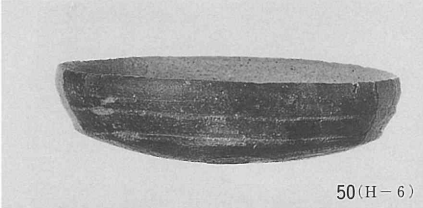

45 (H－5)

54 (H－6)

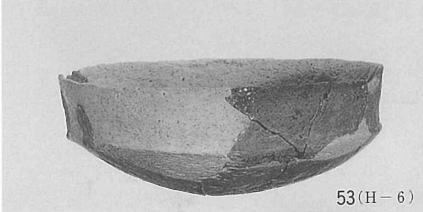
47 (H－6)

52 (H－6)

51(H－6)

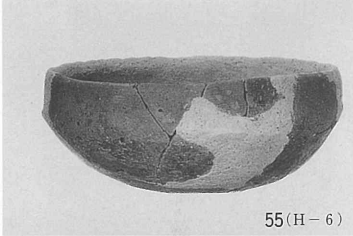


50(H－6)

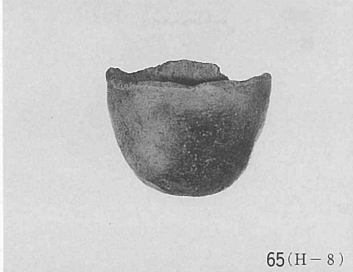


53(H－6)

64(H－7)



55(H－6)

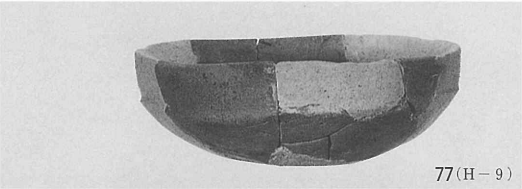


65(H－8)

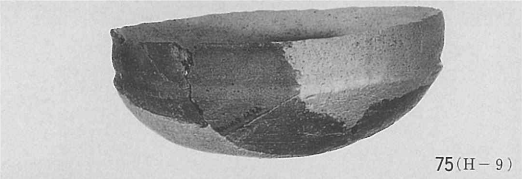
61(H－7)

60(H－7)

PL. 16



77(H－9)



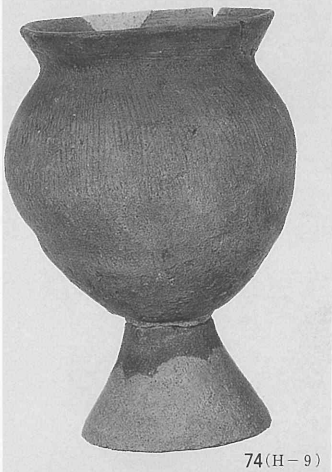
75(H－9)

80(H－9)

69(H－8)

73(H－9)

81(H－9)



74(H－9)

82(H－9)

91(H－10)

88(H－10)

42(H－5)

67(H－8)

調 査 要 項

遺 跡 名 称	内堀遺跡群下縄引II遺跡（うちぼりいせきぐんしもなわびき）
遺 跡 記 号	6E11
遺 跡 所 在 地	群馬県前橋市西大室町2539番地
調 査 期 間	発掘調査　平成6年4月25日～平成6年7月29日 遺物整理・報告書作成　平成7年2月20日～平成7年3月24日
調 査 面 積	1200㎡
開 発 面 積	369000㎡
調 査 原 因	公園造成
調査主体者	前橋市教育委員会　教育長　岡本信正
文化財保護課	課長　本山　卓　文化財専門員　阿久津宗二 埋蔵文化財係　係長　駒倉秀一　主査　関口　孝　園部守央　主任　井野誠一 前原　豊　伊藤　良　狩野吉弘　戸所慎策　新井真典 坂口好孝　大山知久 文化財保護係　係長　宮下　寛　主査　井野修二　主任 山口宗男 真塩欣一　斎藤仁志　林　信也
調査担当者	前原　豊　戸所慎策
調査参加者	石井春江　伊藤孝子　岡田誉富　岡野幾代　川島勝治　神沢方子 木村源次郎　木村トヨ　木村はる子　久保もり子　佐藤佳子　佐野勝次郎 関口みよ子　高橋弘志　高橋やすの　竹内るり子　田中善四郎　角田正次郎 冨岡和子　内藤貴美子　内藤　孝　主代仲治　萩原和子　牧野せつよ 吉田真理子　八木原きぬ子　小保方豊五郎
調 査 協 力	加部二生　小島純一　細野高伯　山下歳信　群馬県教育委員会文化財保護課 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　粕川村教育委員会　公園緑地部公園緑地課 たつみ写真スタジオ　丹生サーヴェイ　井上測量(株)　前橋文化財研究所 スカイサーベイ

内 堀 遺 跡 群 VII

平成7年3月24日　印　刷
平成7年3月31日　発　行

編集発行　前橋市教育委員会文化財保護課
〒371　前橋市上泉町664－4
TEL　0272－31－9531

印　刷　朝日印刷工業株式会社